最新國文讀本

巻五

375.9
Sa19
資料室

41687
教科書文庫
4
810
41-1933
200036
1602

資料室

375.9
Sa19

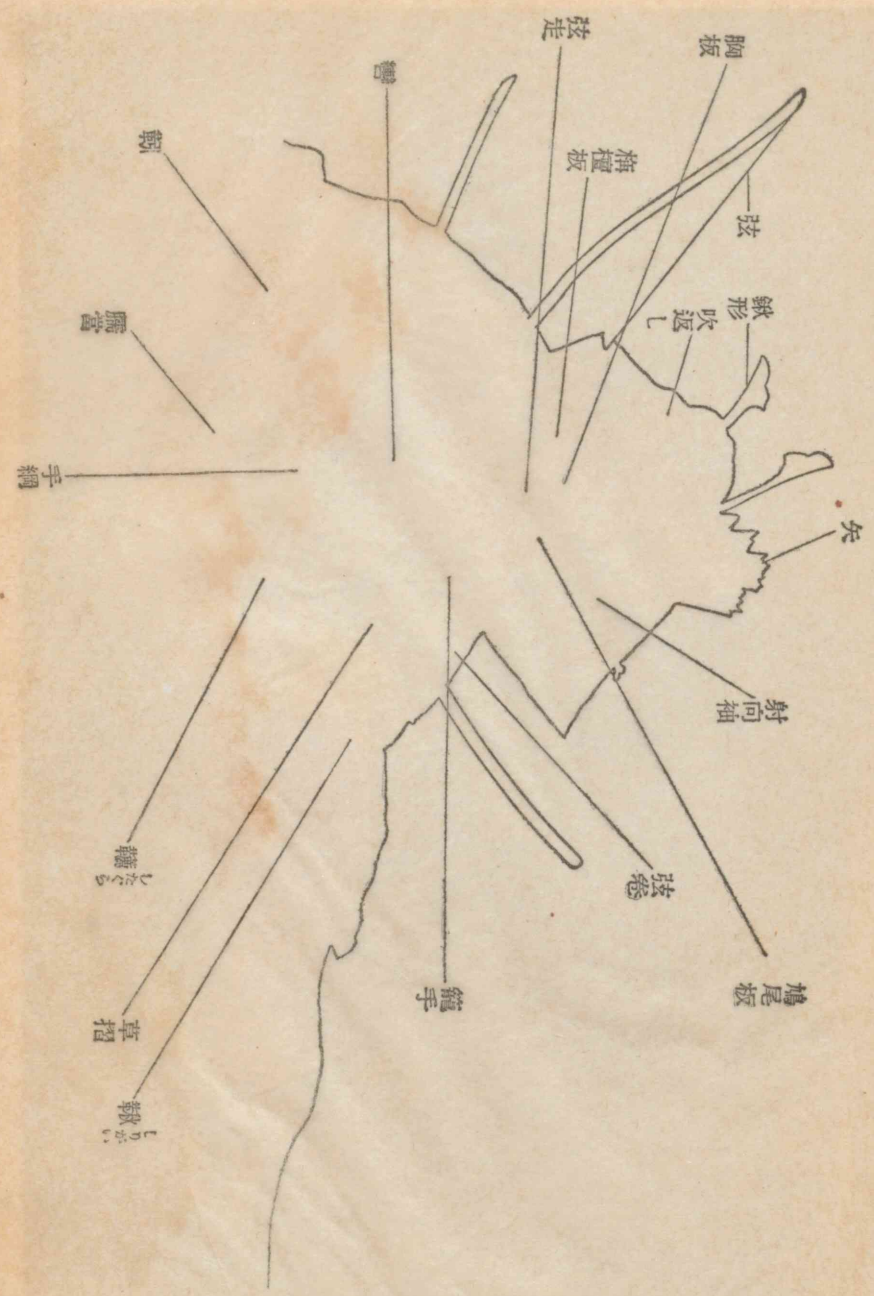
文部省檢定濟

昭和八年十二月二十日・中學校國語漢文科用
昭和九年一月二十九日・實業學校國語科用

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

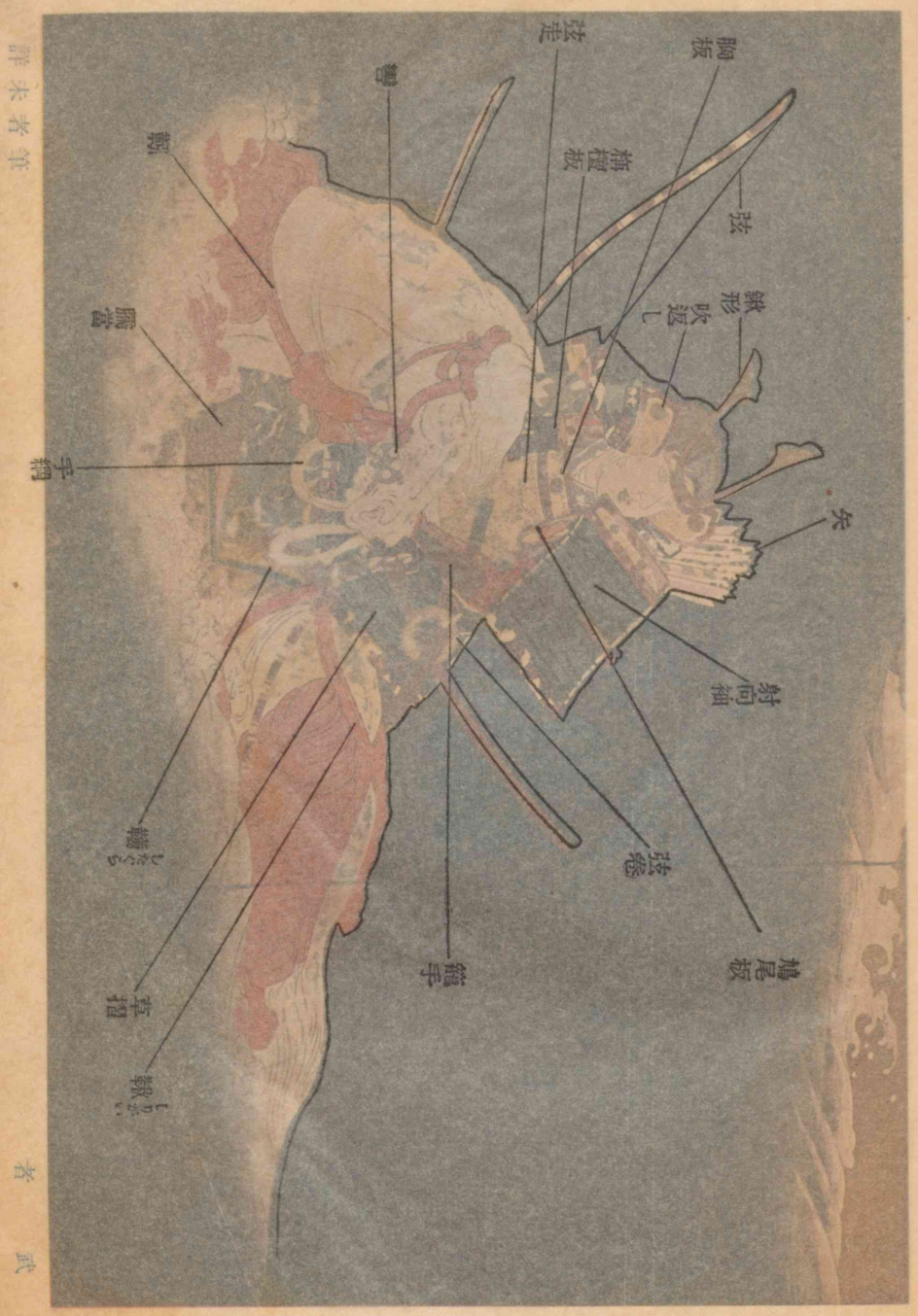
最新國文讀本

湯川弘文社



廣島大學圖書之印

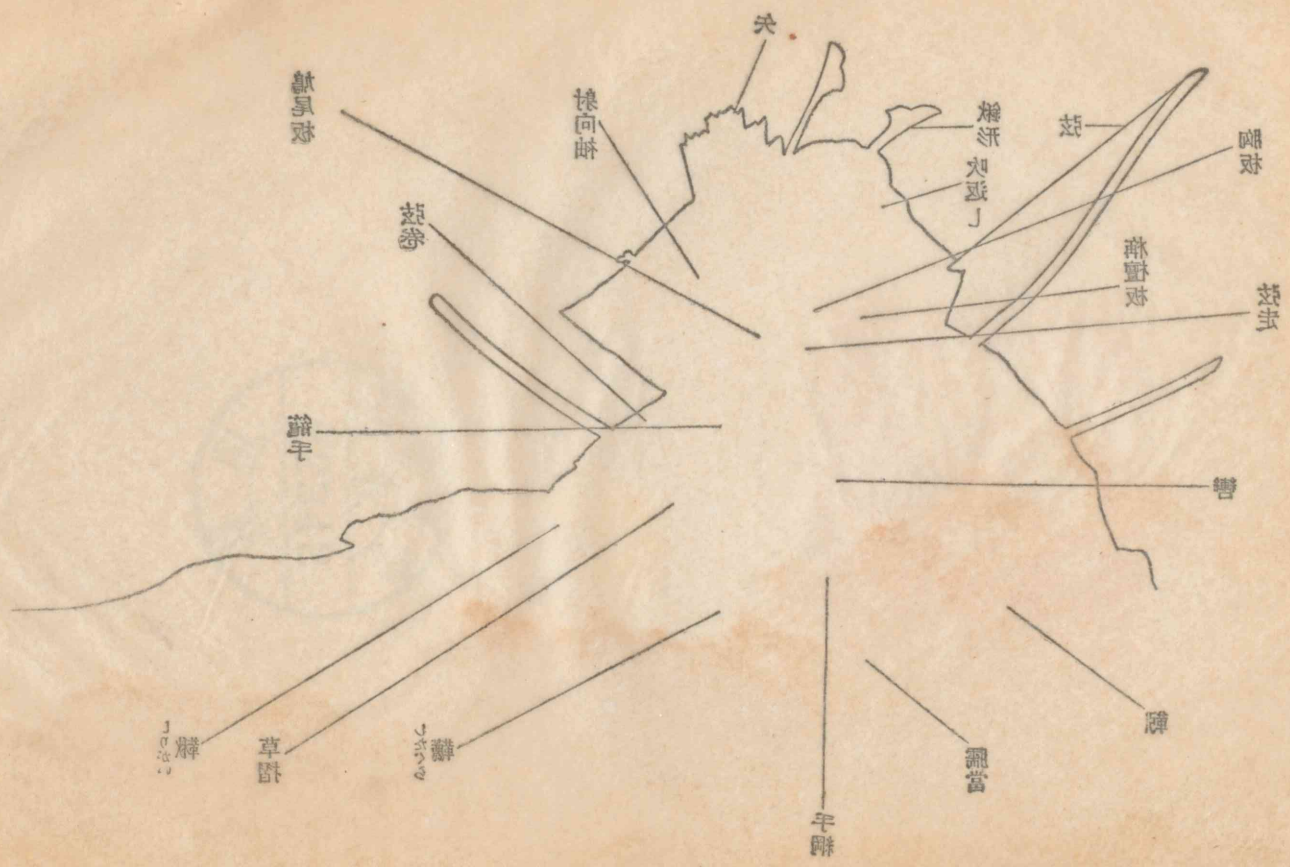
広島大学
教
22342
図書



詳未者筆

廣島大學圖書之印

広島大学 教 22342 図書


矢
神向射
鎧通し
鎧
兜
鎧
兜
鎧
兜

最新國文讀本　卷五

目次

一　春を迎ふ　一
二　萬葉の輝き　五
一　御進講の日　五
二　天の香具山　七
三　曙光　西條八十　一四
四　京の雨　笹川臨風　一六

五月の洞庭湖　二二
六春の潮　二八
七松江の朝　小泉八雲　三一
八元寇論　三宅雪嶺　三八
九競技精神　永井潛　四七
一〇マッターホルン登山　槇有恒　五二
一一山を慕ふ心　田部重治　六〇
一二東海の富士　大町桂月　六五
一三興國の樅　内村鑑三　七二
一四希望の海　川路柳虹　八七

一五塔　市島春城　八九
一六俚諺論　大西祝　九七
一七色彩と自然　松本亦太郎　一〇三
一八秋の大演習　齋藤瀏　一一二
その一　一一二
その二　一一六
一九鎭西八郎爲朝　〔保元物語〕　一二五
二〇待賢門の戰　〔平治物語〕　一三三
その一　一三三
その二　一四〇

二一　柱くぐり　〔東海道中膝栗毛〕　一四五
二二　開拓者の苦心　菊池寛　一五一
二三　學術の意義　芳賀矢一　一五八
〔自修文〕
一　言葉の上の喜劇　松村武雄　一六四
二　銀翼を輝かして　鈴木文史朗　一七三
三　夜叉王　岡本綺堂　一七八
附錄
主要宛字表
通用字表・類字表

廣島大學圖書之印

最新國文讀本　卷五

凛烈　リンレツ。寒さの烈しきこと。

一　春を迎ふ

暦面では二月上旬に既に立春を迎へたけれども、寒氣はなほ凛烈で、朝早く星を戴いて出る日などは、鋭い風が膚を刺すばかりであつた。雪も日を隔てゝ降り繼いだが、さすがに度重なるにつれて、漸く融けるのが早くなつて行つた。日中はほつかりと日が當つて、屋根から雪解の水が、軒を傳つて落ちて止まない。眺めてゐると、珠玉となつては横に走つて落ちる。軒の玉水とはよく云つたものである。

ほぐる　とけはなる。

疎影横斜水清淺　林和靖の詩の一句。まばらな梅樹のかげが清い水に映つたさま。

凍つてゐた大地が柔かくなり、冬枯の木の枝がほぐれて來る。南枝まづ綻び初むる梅は、衆花に先だつて、春の來たことを確實に告げる。梅は樹影を賞する。「疎影横斜水清淺」の趣は、他樹の遠く及び難いところであるが、たゞ新柳だけは、水を得て風情益々佳である。

冬の間眠つてゐた泉も、生命を恢復して、生き〳〵して來た。落葉や枯枝を押流さうとして、水は其處に力を集中する。遂には目的を達して威勢よく石を洗つて流れる。

早春　石山太柏筆

凝結　ギョウケツ。

生く日の足る日　祝詞(のりと)に、祭日をほめていふ語。生々として萬に事足る日の意。

生く國足る國

潑剌　ハツラツ。元氣のあふるゝほど勢ひよきこと。

象徴　シャウチョウ。英語 Symbol の譯。ものそれ自身が直接に或意味を表すこと。

馬醉木　アシビ。アセビ。

連翹　レンゲウ。木犀科に屬する落葉灌木。

春は流動し、夏は湛へ溢れ、秋は澄み、冬は凝結する。水だけでは無い。あらゆる物がかやうに感ぜられる。春は木の芽が萌(は)るといふ義である。今までぢつと縮まつて堪へてゐた生命が、自然の緩みを得て流れ出すのである。

古語に「生く」と「足る」とを以て事物を稱讃する云ひ方がある。例へば「生く日の足る日」「生く國足る國」の如きである。「生く」とは潑剌として生色あるを謂ひ、「足る」とは豐滿にして充實せるを謂ふ。この「生く」こそは、早春を象徴する語としても實に適切であると思ふ。

梅に續いて咲出る花が待遠しい。柳に後れて芽ぐみ來る新葉が期待される。櫻は國花、賞すべく貴むべし。椿・馬醉木にはすぐれた古歌が多く想起せられ、藤・山吹には逝く春が惜しまれる。桃・李・紅梅・海棠・木蘭・連翹等、支那趣味の花の多いのも賑はしい。樹葉

空林　木の葉の落ちつくした林。
山を燒く　春、草の發生を盛んならしむるために、野山の枯草を燒くこと。
蠢く　ウゴメく。
冬蟄　トウチツ。動物が冬期地中の穴にとぢこもつて活動せぬこと。
菜根云々　菜根は粗末な食物。此の句は、「菜根を咬み得ば、百事做すべし。」といふ呂氏師友雜志の語による。

は空林に煙の如く萌え初めたのが、亦と無く活氣を覺える。

闇の夜空に、在りとしも見えなかつた四方の山々の姿が、裾から段々浮き出して來る。風無き夜に火を放つて山を燒くのである。火は裾模樣のやうに山を包んで、上へと燃え昇り、山頂の一本松さへ夜空に煙つて眺められる。野山を燒いた跡には、微雨を待ちつけて、蕨が今にも頭を擡げるであらう。

小閑を得て、久しぶりに今日は屋後の岡に登つた。思の外に麥は青み百蟲は蠢いてゐる。江山一帶の煙霞に對し、揚雲雀の聲を聞きながら、冬蟄の啓けたことを喜んだ。世は正に春である。菜根を咬んで裏畑の土を耕し、以て我が家の食味を賑はしたいと思ふ。

浮彫　ウキボリ。浮出のほりもの。
太平樂　タイヘイラク。雅樂の曲名。
陪聽　バイチヤウ。御側に侍つて共に聽くこと。

二　萬葉の輝き

一　御進講の日

昭和六年五月七日、空うらゝに晴れて風なごやかなり。午後參內す。侍從長に導かれて御學問所の廊に立ちぬ。芝生綠なる前庭には、初夏の日の光あまねく輝き、西南の丘には、青葉が中に、紅躑躅、錦を裝へり。小雀(こがら)かとおぼしき鳥の聲聞ゆ。

御襖また壁上には、群れ飛べる燕を描き、欄間には浪を浮彫にせり。塗飾めでたき太平樂の舞人の木彫、廊に近く、臺の上に置かれたり。

陪聽の人々は、內府・宮相・次官・侍從長・侍從武官長・皇后宮大夫・女官長をはじめ、側近の人々なりき。

萬葉學　マンエフガク。萬葉集に關する學問。
聞え上ぐ
天寵　テンチヨウ。
家門の譽
先人
すべ　方法。
恩遇

謹みて萬葉集に就きて進講し奉る。天顏咫尺にして、恐懼措く所を知らず。たゞ誠心誠意遠き世の歌がたり仕へ奉る。

今日の御進講のこと、予が一身の光榮はいはむもかしこけれど、萬葉學の爲にも、亦光榮のきはみといひつべし。顧みるに明治四十五年には、東京帝國大學にして、明治天皇の御前に、萬葉集の古鈔本に就きて聞え上げ、今また兩陛下の御前にしてこの無上の天寵を荷ふ。家門の譽、何ものかこれに若かむ。

今日五月七日は、陰曆と陽曆との相違はあれども、本居宣長翁生誕二百一年の日に當れり。翁の流れを汲める先人の學を承け繼げる身として、感激胸にみち、言はむすべを知らず。更に萬葉學の爲に盡して、この恩遇に報い奉らむことを期するのみ。

（佐佐木信綱）

香具山　香久山とも書く。奈良縣磯城郡香久山村にあり。畝傍・耳成と共に大和三山の一。
持統天皇　第四十一代の天皇。

二　天の香具山

春過ぎて夏來たるらししろたへのころも乾したり天の香具山

持統天皇が、藤原の宮のほとりから天の香具山を御覽遊ばされて、お詠みになつた御製の歌である。

いつの間にか春が過ぎて、夏が來たさうな。此處から見える青青とした香具山に、白い布の衣が乾してあることよ、の意。

百人一首にこの歌を、二句を「夏來にけらし」四句を「衣ほすてふ」と誤つて入れ、且あまりに口馴れ耳馴れてゐる爲に、感じが薄められてはゐるが、佳い御歌である。綠の山裾に、白い衣のほしてある印象的の景を見そなはして、季節の移り變りの早いのに驚き給うた、いかにも女帝らしい御製である。なほ「衣ほすてふ」では「衣を乾す

文武天皇　第四十二代の天皇。
人麻呂　柿本人麻呂。飛鳥藤原時代の有名なる歌人。
草壁皇子　天武天皇第二の皇子。文武・元正の二帝の父君。
懷舊の情

といふ」の意になり、人傳に聞し召したことになつて、御製の眞意をそこなふのである。

ひむがしの野にかぎろひのたつ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

これは、文武天皇が未だ輕皇子とよばれ給うた頃、歌人人麻呂が隨從して、大和宇陀郡なる安騎野に宿つた時に詠んだ歌の一つである。この安騎野は、皇子の父君草壁皇子が、往時しば〳〵獵に赴かれた野である。その地を慕つて、輕皇子が宿られたといふこと、この一事がこの歌を理解する上に是非知つておかねばならぬことである。この歌に故皇子に對する懷舊の情は直接に現れてはをらぬが、底の心は右の如くであつたのである。歌の意は、野に宿つた曉方の景色を詠んだので、東の方の空にあたつて、日のさし昇

曙光　ショクワウ。
巧緻　カウチ。
萬葉歌風
精髓　セイズヰ。
敏馬　兵庫縣武庫郡。
野島　兵庫縣津名郡。

らむとする曙光の、空を輝かして來たのに氣がついて、ふと振りむいて見ると、月ははや西に傾いてゐるといふのである。廣い野中の夜あけの景色が、單純に大きく、些の巧緻なく、些の厭味なく詠んである。まことに萬葉歌風の精髓を發揮した歌である。

たま藻かる敏馬をすぎてなつ草の野島の崎にふねちかづきぬ

敏馬は、いま大阪から神戸へ行く海岸にある地である。野島の崎は淡路にある岬である。これは藤原の都から西國へ赴く時の作で、歌の意味は極めて明瞭。美しき藻を刈る敏馬の浦を過ぎて、海路平安、野島が崎に船が近づいた喜を歌つたものである。

元來、旅行に關する後代の我が國の歌の中に、最も缺けてゐるのは海洋を歌つた作、もしくは海上でうたつた作である。萬葉集の

羇旅の歌のうちには、この種のものが比較的多く、爲に一種の異彩をなしてゐる。この歌の如きも、この種の作に屬する一つである。

士やも空しかるべきよろづ代に語り續ぐべき名は立てずして

こは山上憶良が、重き病の床に横たはりつゝ感慨に堪へないで詠んだ作である。

苟くも男子たるものにして、何のいさをも立てず空しく世を過すべしやは、萬代に言ひ傳へ、語り繼ぐべき立派な名は立てないで、の意。

由來名譽を重んじたのは、わが國古來の國民性の一特質である。この歌の如きは、この特質の最も鮮かに現された作である。而して萬葉集の熱情歌人憶良の面目の最もよく發揮された作として、

羇旅　キリヨ。たび。
異彩
山上憶良　奈良朝時代の有名なる歌人。類聚歌林の著あり。
熱情歌人

注意すべきである。

秋の野に咲ける秋はぎあき風になびけるうへに秋のつゆおけり

大伴家持の作。歌の意味は、何等説明を要しないほど明瞭暢達である。野の萩の花が風になびいてゐる上に、露がおいてゐるのである。秋といふ語を四つ重ねて技巧を弄してはあるが、少しもいやみに感じないのは、ありのまゝの實景を詠んだからである。この歌とは全く趣を異にしてゐるが、同語を最も數おほく重ねた歌が、鎌倉初期の明惠上人の集にあるから、因に擧げておかう。「あかあかやあか〳〵やあか〳〵やあか〳〵や

つらしも

この夕べ、香具山に霞が棚引いてゐる、春が來たのであるらしい、といふので、歌の意は極めて明瞭である。「ひさかたの」は天の枕詞。この「ひさかたの天の香具山」といふ山名の現し方が、春が立つといふことに對して、大いに活きて用ひられてゐる。

何となく大きい、壯重な、しかも長閑な景色のこもつた作である。古今集以後諸々の歌人は、立春の景色を樣々に詠み試みたが、未だこの作に勝る名歌は殆ど之を見ないといつてよい。

古今集　二十一代集の一。二十卷。醍醐天皇の御代に撰ばれたる最初の勅撰歌集。

大和國原

庭草にむらさめ降りてこほろぎのなく聲きけば秋づきにけり

庭に生ひしげる草に村雨がさびしく降つて、こほろぎのしめやかになく聲を聽くと、いかにも秋になつたといふことが感じられる、の意。平明のうちに、秋の深いさびしみが切實に歌はれてゐる。また一佳作とするに足りる。

切實
佳作

諏訪の海や氷解くらし遠つあふみ天の中川みぎはまされり

（賀茂眞淵）

三　曙光

亞細亞の東聖土有り。
天地の正氣鍾まりて
積むや芙蓉の峰の雪、
咲くや萬朶の櫻ばな。

芙蓉の峰

萬古にわたる皇統は
空に燦たる天の河、
仰げばたかき洪恩に
一億の民たゞなみだ。

洪恩

あゝ此の國の水清く
異邦
嘗て異邦に汚されず、
あゝ此の國の山青く
生々日々に新なり。

孝悌

君臣の義と父子の愛
花づなのごと交はりて、
仁慈と忠と孝悌と
琴の音のごと調あり。

西條八十
詩人。早稲田大學教授。東京の人。明治二十五年生。

今歐西に日は暮れて、
光を呼ばふ聲すなり。
世界は明けむ、ほの〴〵と、
神の國なる東より。

（西條八十―日本精神）

五風十雨
晴好雨奇
風韻
南朝云々　杜牧の「江南春」と題する詩の中の句。
十二帝陵云々　藤井竹外の「風雨望ニ寧樂一」と題する詩の中の句。

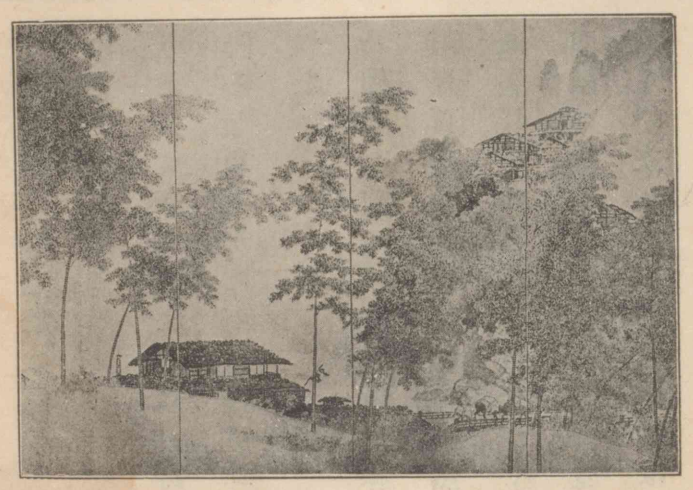
四　京の雨

旅の日の雨は厭はしく、月の夜の雨は憎い。しかし時には、五風十雨、甘雨と呼ばれ、また喜雨と稱して喜ばれる。雨は萬物生育の一源である。殊に晴好雨奇といはれて、雨の風趣は棄て難い。畫に描いて面白いのみならず、詩に歌に俳諧に詠んで樂しいのみならず、雨景それ自らが風韻饒かである。雨後の山、雨後の月、雨後の新綠、皆善い。「南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中。」と歌つたのも、「十二帝陵低不見、白風黑雨滿南都。」と詠んだのも、蓋し實感から來たのであらう。

一とせ河内の觀心寺を訪れた時は、秋雨の降る夕暮近くであつた。佛殿の中は薄暗く、夕闇はあたりを鎖して、寒氣はひし〳〵と

燈明　トウミヤウ
一穗の光　イツスヰのヒカリ。
祕佛
一鑿　イツサク。
瀝ぐ　ソソぐ。
端嚴無雙
無我の境

身に迫つて來た。燈明一穗の光は、ほんのりと其の中にはかない信仰の象徴の如く輝いてゐた。しかし寺僧の案内で、此の寺の祕佛と聞えた如意輪觀世音の御像を蠟燭の光によつて拜んだ時は、藝術の威嚴に打たれ、思はず其處にぬかづいて、靜かに凝視せざるを得なかつた。



細雨　川合玉堂筆

名工が熱烈な信仰を便りに、腕の冴えを見せて、一鑿々々に心血を瀝いだ其の結晶は、端嚴無雙の此の佛像となつたのである。此の御佛に對する者は、現世を超越して、夢の國、藝術の國、信仰の國に遊んで、無我

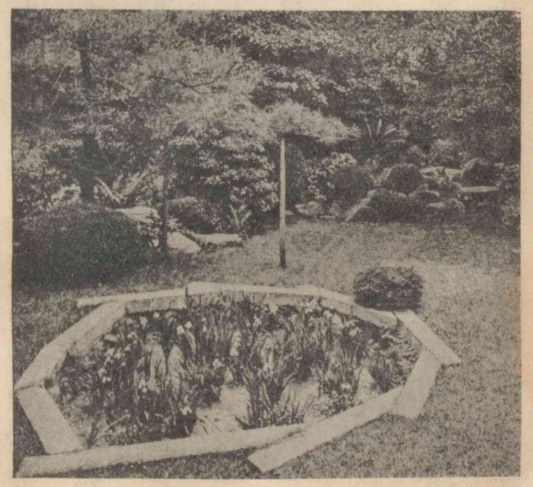
の境に逍遙せざるを得ない。現世の蜉蝣のやうなはかない美しさとは異つて、之は永遠の美しさである。とこしへに存する藝術の花である。御佛の前を立去らうとして、漸く我に返つた時、外に降るしめやかな雨の音が耳に入つた。

蜉蝣　フイウ。
藝術の花

佛殿の前には、鐵燈籠が春風秋雨幾百年の間同じ姿で寂然と雨に濡れそぼちながら立つてゐる。四圍の山々は煙雨の間に魔王の如く屹立して、夜の黒い手は刻々に延び擴がつて行くのであつた。

本法寺　京都市上京區にあり。

時雨そぼ降る日、本法寺に三巴の庭を訪づれた。四明が嶽には



本法寺三巴の庭

雨雲低く徂徠し、大路小路の軒には、時雨の點滴がたばしつてゐた。大きな伽藍の緣側に佇んだ時は、寒さが腸にしみ入るやうに覺えた。案内してくれた僧の素足も寒げに見える。庭は本阿彌光悅が數寄を凝らした、謎のやうな結構である。初めて之を見た時は、たゞ茫然としたのであつた。暫く凝視してゐると、次第に其の謎が解けて來た。なほ視つめてゐると、庭は其の眞面目を展開して行く。

四明が嶽　比叡山の一支峰。
伽藍　ガラン。僧伽藍 Samgharama の略。寺。
本阿彌光悅　書畫其の他諸藝に通ず。寛永十四年歿。年八十一。(一二一七—一二九七)

時雨は樹と石と砂とを潤して降つたり止んだりしてゐる。暫く止んでゐた時雨は、北野神社の近くで、一陣の風を誘うて又さつと降り出した。今日は二十五日のことゝて、天神樣の市が立つてゐる。時雨は容赦なく露店の天幕と葦簀とにしぶきの音を立てゝゐる。人は右往左往に足を空ざまにして惑ひ走る。其の

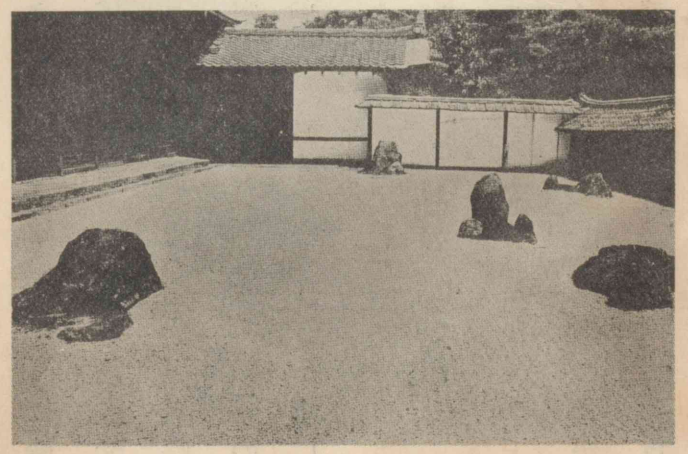
市が立つ
容赦　ヨウシヤ。

龍安寺　京都市上京區にあり。臨濟宗の寺。
永觀堂　京都市左京區にある禪林寺のこと。
苦茗　にがい茶。
相阿彌　足利義政に仕へし畫家。銀閣寺の庭を造る。

時雨の中を突切つて、龍安寺に虎の兒渡りの庭を觀に行く。

嘗て予は秋雨にそぼ濡れながら、永觀堂に紅葉を觀に行つた事があつた。傘さしながら、立寄る人もない池のほとりで、飽くことなく色づいた秋色を賞でた。その歸るさには銀閣寺に立寄つて、一椀の苦茗に相阿彌の作れる庭を心ゆくまで味はつたのである。

虎の兒渡りの庭も同じくこの相阿彌の作と云はれてゐるが、眞僞は明瞭ではない。若し相阿彌とすれば、銀閣寺に奇巧を見せた彼は、



龍安寺の庭

落想　思ひつき。
無何有の鄉　空想上の理想鄉。
洛中・洛外　洛はみやこ。京都の内外。

虎の兒渡りに拔群の落想を現してゐる。三巴の庭で謎を解き得たと信じた予は、虎の兒渡りを見て、無何有の鄉に遊ぶが如くに感じた。時雨はまう霽れて、淀・山崎の山々には明るい日影が射してゐた。

洛中・洛外は予が最も好む所の境である。雨に逢ふ毎に、雨の都の美觀を心ゆくまで眺める。雨は陰氣で、鬱陶しいものとされてゐるが、閑寂を味はふには、雨に優るものはない。殊に春雨の都に於て、時雨の都に於て、一層此の感を深くするのである。

（笹川臨風の文による）

洛外に椿の藪や春の雨

岳州府　支那湖南省にあり。
鼓樓
甎瓦　センガワ。
金碧燦爛　キンペキサンラン。

五　月の洞庭湖

船は岳州府についたが、遠淺なので、岸を少し離れてとまつた。

岳州府城は、小高い丘の上にあつて、幾千の人家を包んだおごそかな城壁は、高い崖の上をめぐつて居る。岳陽樓は、城壁の向つて東の方に、鼓樓のやうな風に建つてをる三層樓である。城壁の甎瓦が幾百年の風霜に黑ずんでをるに、建て直してさばかり久しからぬ岳陽樓の金碧燦爛たる色彩の配合が、極めて美觀で

岳陽樓

からさへづり
蘆のまろ屋　蘆にて葺きたる假屋。
減水期

ある。

上陸しようと船ばたに出ると、划子船（コワーツセン）といふ小船が幾艘となく我が船の傍に漕ぎ寄せて、これに召せ、吾が船に召せといふのであらう、からさへづりにかしましくいふ。その船の漕ぎ方が變つてをる。小船の舳先に二箇の櫂があつて、兩手で漕いでゐる。しかも漕手は皆若い女で、その櫂のあやつり方は巧に美しい。その女の上衣の色が、淺黄や紫などであるから、划子船の行交ふ樣を遠く望むと、あたかも冬の流に、春の花を浮べたかのやうに思はれる。

岸に上ると、岸邊の小屋は「蘆のまろ屋」ともいふべく、蘆でかまぼこ形に葺いた低い家である。否、家とはいひがたい、人が這つて入る程で、一二疊位の廣さである。これらの小家は、減水期の間だけあるので、水が增せば岸まで水が滿ちる爲、とり壞して他へ移るさ

うである。さういふ小家の間を通りぬけて、高い石磴をあがり、城門をぬけて、岳陽樓へ上つた。案内の僧に導かれて、壁に題した詩、や聯の句などを讀んで、三層樓の上にあがつた。かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景には變りがない。たゞ見る浩々湯々、洞庭湖は目の前に天地の大幅を廣げてをる。湖の門戸には、かの堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左に、いづれも吾が相摸なる江の島ぐらゐの大きさで、安房なる鏡が浦の沖の島・鷹の島が、

漁村返照　横山大觀筆

那古の觀音の方から見た位置のやうに並んで、さながら洞庭宮を

聯　レン。

范文正公　宋の宰相范仲淹の事。（一六四九—一七一二）

浩々湯々　カウカウシヤウシヤウ。岳陽樓記に、「浩浩湯々、横無二際涯一。」とあり。水のひろびろしてゐること。

堯　ゲウ。支那古代帝王の名。

湘君　シヤウクン。堯の皇女娥皇・女英の稱。湘中記に、「舜二妃死爲二湘水神一、故曰二湘妃一。」とあり。湘妃は湘君に同じ。

守る獅子・狛犬の如くである。其のたゞ中に今や夕日は沈まうとしてゐる。この天地の大觀に浸つて、人をも吾をも全く忘れてゐたが、同行の友に促がされて樓を下り、船に歸つた。

幸に風は追手、帆を一ぱいに張つて、まつすぐに洞庭湖の中に入らうとする。夕日は二つの島の間に落ちて、見る〳〵紅の眞玉が湖心に沈む。かへり見れば岳州府城に月は昇つた。漢口領事であつた山崎犁雲が、「洞庭八百里、月照岳陽城。」とうたつた通りである。日を數ふれば十二月三日——あたかも舊曆十月十五日の夜。瀟湘八景の洞庭秋月ではないが、望月の夜洞庭を過ぎる、何といふ好因緣であらう。

夕日は遂に湖心に沈んだ。その餘光が空に輝くや、空の色忽ち紅に變じ、その紅の色が湖上に映じて居る。その中を、一帆また一

湖心

瀟湘八景　江天暮雪・瀟湘夜雨・山市晴嵐・遠浦歸帆・煙寺晚鐘・平沙落雁・漁村夕照・洞庭秋月。

帆、風のまに〳〵遠く近く、かつ顯れかつ消える。かういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばと、切に思ひ入つたことであつた。

美しかつた夕ばえも光を失つて、湖の上は薄ぐらくなる。月はいよ〳〵澄みのぼる。見えるものは唯、黃金・白銀の浪。「皓月千里、浮光躍金。」といふ樣である。廣い果知らぬ湖の上を進みゆく我が船の近くに、二三の釣船がをる。むかし卓彥恭が洞庭湖を過ぎた時、月下に釣せる小船を呼びとめて、「魚ありや否や。」と問へば、老人らしい聲で、「魚はないが詩がある。」と答へて、一詩を吟じ去つたといふ。さる風流の漁翁ありや否やを知らぬが、二三の小さな釣船が、この大いなる湖の月夜の景趣を添へてゐる。

月は良く風は追手、船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふ

皓月云々　前記「岳陽樓記」中にある句。

帆腹飽滿　帆一ぱいに風をふくませてゐること。

一瞬千里の勢

ける。月はいよ〳〵澄む。何ともいひがたい感じが胸にみちて、我が身そゞろに我あるを知らず、この隈なき月と果なき湖とに對うてをつた。一昨年の初秋富士に登り、絕頂に見た七月十七夜の月。かれは山頂、これは湖上。しかもあはれは同じあはれで、風月の緣に富む事を天に謝したことであつた。

風まともに眞帆にあたりておもしろう矢の如はしる月夜
のわが舟
わが世によき幸得たり洞庭の湖の月夜をよき風にわたる
眞白帆によき風みて〻月の夜を夜すがら越ゆる洞庭の湖

六春の潮

高濱虛子

晉たてゝ春の潮の流れけり
霧の中に現るゝ連を待ちにけり

虛子筆

草に置いて提灯ともす蛙哉　虛子

村上鬼城

高燈籠嵐の空のたゞならぬ
遠山に日のあたりたる枯野かな
大雪のなほ降り積みぬ年の暮

村上鬼城
名は莊太郎。俳人。群馬縣の人。慶應元年生。

元日や晉もしづかに岩清水
榛名山大霞して眞晝かな
船ばたに竝んで兄鵜弟鵜かな
大南瓜これをたゝいて遊ばんか

松瀨青々

白き蝶野路に吹かるゝ薄暑かな
山櫻水の勢ひ岩を打つ
夢殿にもたれて冬の一日かな

松瀨青々
名は彌三郎。俳人。大阪府の人。明治二年生。

大利根を染むる落暉や行々子
池尻や藻の花白き夕月夜
熱風を送りて澄めり秋の空

青木月斗

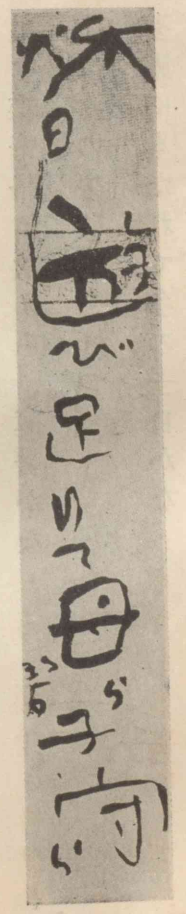
青木月斗
名は新護。俳人。大阪府の人。明治十二年生。

河東碧梧桐
名は秉五郎。俳人。愛媛縣の人。明治五年生。

秋日遊び足りて
母ら子守ら　碧

行水をすてゝ湖水のさゝ濁り
貝掘りの戻る濡れ身や三日の月
蟹取れば蝦も手に飛ぶ涼しさよ

河東碧梧桐



碧梧桐筆

子を叱るさまでもと思ふ瓜の宿
春早き富士は遠眼鏡の中
病みて藤もらうて疊に垂るゝ藤
杉山の十日すぎの月夜となる雪

荻原井泉水

杵

脈搏
ミヤクハク。

禪刹
ゼンサツ。禪宗の寺。

洞光寺
松江市雜賀町にある曹洞宗の寺。

勤行
ゴンギヤウ。

七　松江の朝

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな大きな脈が搏つやうに響いてくる米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で最もあはれに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空をゆるがす。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、

「大根やい。蕪菁や蕪菁。」「薪や薪。」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の

大橋川　中海と宍道湖との間を通ずる川。
宍道湖

星雲　光輝微かにして雲霧狀をなせる天體。

底から伸びた春の若葉の軟かな綠の雲越しに、朝景色を眺めやつた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わなゝくやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。この川は宍道湖に向つて口を開け、湖を右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。

小泉八雲

對岸の日本の家屋は戸がみな閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡きる處に長くたなびいてゐる。その星雲狀をなした長い帶は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が

味爽

分光鏡　光を分析する器械。

蓬萊　ホウライ。

蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大きく、昧爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帶の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つに連れて、その趣は徐かに變つて行く。朝日の黃色な緣が見えてくると、今までのよりは更に强い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の色で蒸氣立つ黃金色へとかはる。朝日の方へ向くと、橋桁の澤山竝ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げんとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。しかしこの精靈は雲と

同様、光線を受けて薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から手を拍つ音が起つてくる。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えないが、對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿は見える。めい〳〵帶に小さい手拭を挿んでゐて、顏と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顏を朝日に向け、四度手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある輕い優美な、そして新月のやうに彎曲した小船からも出てくる。

埠頭

潔齋　ものいみすること。心身をきよむること。

松江大橋

杵築の大社　島根縣杵築町にある官幣大社出雲大社。大國主命を祀る。

一畑山　島根縣簸川郡にある寺。本尊は藥師如來なり。

この頗る異樣な恰好の船の上から、手も足も裸の漁師が、黃金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が增して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が、今皆朝日――お日樣――天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふ事を謝し奉る。」言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人々の衷心である。朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築（きづき）の大社へ向つてもさうするのである。顏を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ隨分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふ藥師如來の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に隨ひ、掌を合せて輕く擦る者もある。しかし日本で最古のこの國では、佛教徒も亦神道信者であるから、

均整（キンセイ）

楔形　▽上圖の如き形。

誰も誰も古風な神道の祈の文句を唱へる。

「拂ひ給へ、淨め給へ、とほかみゑみため。」

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始まり出し、橋の上にはからころといふ下駄の音が、だん〳〵高く響いて來る。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛んな舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る、數へきれぬ人の足がちら〳〵するのは、驚くべき光景である。その足は皆細く、恰好が均整を得てゐて、ギリシヤの古甕に描いた人物の足のやうに輕やかで、そして足を運ぶ時、指を先に下す。實際下駄では外にしようがない。それは、踵は下駄にも著かねば、地にも著かないし、足は楔形の木の臺を前へ傾けては進むのであつた。足が下駄の上に

飛白

小泉八雲　Lafcadio Hearn　明治二十八年日本に歸化す。英文學者。明治三十七年歿。年五十五。

從四位

立つだけでも、慣れぬ者には困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄を穿いて、親指と他の四本の指に挾んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駈けてゆく。それでも躓きもせず、又下駄もぬげない。更に珍らしいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかしそれを穿いた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに樂々と闊歩する。

やがて學校へ急ぐ子供たちが出てくる。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の著物の闊い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏きをするやうに見える。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で眠つてゐた小蒸汽船は、煙突から煙を吐きはじめる。

（小泉八雲―まだ馴れぬ日本の瞥見）

呑噬　ドンゼイ。他國を併合する意。
干戈を交ふ　戰爭すること。
時宗　北條氏第六代の執權。時賴の子。弘安七年歿。年三十四。（一九一一―一九四四）

八　元寇論

元は國を滅すること四十有餘、當時よくその呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たびこれと干戈を交ふるや、これを擊破して、また近海に出沒することを能はざらしめたり。初め、元、日本に使者を遣して好を通ぜむことを求めしが、我が時宗は斷乎としてこれを拒みしかば、こゝに戰端は開かれたるなり。これに就きて自ら三箇の疑問の出づるあり。その一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。その二、拒絶は果して道理を具へしか。その三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の志よりせしにあらず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして、寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め、元の

文永　龜山天皇の御代の年號。年九十余
弘安　後宇多天皇の御代の年號。
鏖にす　ミナゴロシにす。

我に使者を遣したるは、實に文永五年なりき。時宗年甫めて十八、余はその拒絶の獨斷ならざりしを信ず。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を經て弘安四年に至り、終に大擧して入寇す。時に時宗意氣正に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならむ。故に一擊して元兵を鏖にしたる、時宗與りて功ありとす。たゞ十三年間同一の方針なりしは、國論のこれを致せるものとすべし。

元の好を通ぜむことを求め、而して我のこれを拒絶せしは、實に我に於て拒絶するの已むべからざりしなり。彼の國書や、文辭堂堂、恩威竝び具はる。彼必ず以て我を心服せしむるに足ると爲しならむ。而も、顧みて我が國の歷史より察すれば、拒絶の外、他に採るべき策あらず。その「問を通じ好を結び、以て相親睦せむ。」とい

不遜　フソン。高ぶる。

躊躇　チウチヨ。ためらふ。

梟す　ケウす。

へる、辭として難ずべきものなけれども、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態あるは、その語氣に明かなり。彼自ら何の異とするところあらざるべしと雖も、我に在りては古來未だ此の如き不遜の國書に接したることあらず。怒らざらむと欲するも豈得べけむや。當時彼の國書を覽たるもの、一として書辭の不遜なるを咎め、且つ憤らざるはなかりしならむ。國土面積の廣狹、相懸隔するの著しきを思ひて、國力を誤信せし者は、成るべく圓滑に局を結ばむとして開戰に躊躇せしならむ。されど理非は既に明白なりしなり。元主、使者を派して我を促し、我これを斬りて首を梟せしかば、その怒りて兵を發し入寇せしこと、彼に在りては已むを得ざりしところならむ。然れども敢へてこれを決行するに至りし所以のものは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若しよく

殲滅

危殆に瀕す　あぶなくなる。

元寇襲來圖

我が國情に通ぜしならむには、決してこの擧に出でざりしなるべし。彼すでに戰を開くに決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風俄かに起り、兵船多く覆沒す。我が兵これに乘じて襲擊し、殆どこれを殲滅せり。乃ち言ふ者あり、「當時若し颶風起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならむ。」と。言者の說にして當れりとせば、卽ちかの開戰に決せしは、策の宜しきを得ざりしものと謂ふべし。しかもその言ふところや、實に謬れるの甚しきものにして、我が開戰に決せしは、必勝の算ありて然りしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵、皆上陸し

コロンブス Christphorus Columbus（一四四六―一五〇六）

兵站 ヘイタン。軍隊の後方にありて軍用品の出納を取扱ふこと。

たりとせば、彼我の勝劣則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於ては少からざれども、かばかりの軍隊を以てよく日本征服の功を擧げ得べきか。

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も發達せる時といはれ、我に寇せし兵船は、コロンブスの亞米利加發見に用ひしものよりなほ堅固なりきと傳へらるると雖も、その颶風に遭ひて多く破壞せるに觀れば、以て略〻その構造の如何を察するに難からず。彼累りに諸邦を征服せしも、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれなし。又彼が操船に巧なりしやも疑なきを得ず。すでに十萬、二十萬の軍隊を送遣せる後、なほ絕えず兵站の連繼を過たざることと、果してその能くするところなるか。糧に敵に賴るの策なりとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業

拱く コマヌく。

擊摧 ゲキサイ。うちくだく。

鬱勃 ウツボツ。

ならずや。若し我に於て、手を拱きて彼の欲するがまゝに從ひしならば、或は徵發に依りて全軍を給養し得たるべけれども、これ到底望みて得べからざるところなり。

營に軍隊給養の難きのみにあらず、彼我交戰の結果、彼また勝つべからざる運命ありしなり。承久の亂、北條氏の兵、畿內を指して西上せし者十九萬人、若しこれに關西の兵を合せば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに我は地理に精しく便利を占むること亦多し。十萬、二十萬の元兵を擊摧するに於て何かあらむ。戰亂を見ざること五十餘年に亙れりと雖も、國を擧げて武門の治を享け、未だ曾て一日も武を練ることを怠らず。爾後久しきを經ずして、天下麻の如く亂れ、數百年たゞ戰爭をこれ事とせしもの、決して偶然なりとせず。當時この鬱勃たる士氣を以

マルコ・ポーロ Marco Polo　伊太利の旅行家。元に仕ふること二十年。日本を初めて歐洲に紹介せし人。（西暦一二五四—一三二三）

て元兵に對す。これを殲滅するは寧ろ易々たりしなり。且マルコ・ポーロの記するところに據れば、元兵の大敗せしは、その兩將の不和に基づけるが如し。我が軍の士氣の旺盛を以てして、彼が主將の不和に加ふ。單にこれのみを以てすとも、勝敗の數すでに明かなりといふべし。いかなる點より察するも、我、彼を殲滅するの理ありて、彼、我を征服するの虞なし。我の斷々乎として拒絶せる、決して無謀の擧にあらず。

龜山天皇の、御身を以て國難に代らむと祈らせ給ひしはいとも畏し。すでに上皇の御身を以て國難に代らむとし給ふを目睹す。國内の民、誰か奮つて國に殉ぜむとせざらむ。これが爲に、上下擧りて國難に當らむとの決心を固めたるや、疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來れりとせむか、乃ち我が兵の

邀擊 エウゲキ。

鏖殺 アウサツ。

醞釀 ウンヂャウ。

いかに勇を鼓して邀擊せしかは、知るべきなり。その海上に於けると同じく、これを陸上に鏖殺すべきやは必せり。颶風の起りしは幸といふよりも寧ろ不幸といふべし。元兵にして上陸したらむには、我初め多少の苦戰あらむも、遂に全勝を制し、更に勢に乘じて高麗を略し、かくて漸く醞釀せる國内の紛爭を移して、外地の經略を事としたりしなるべく、爲に我が日本の獨り顯著なる發達を遂げしのみならず、東洋全體亦大いに進歩の見るべきものありしならむ。颶風起りて戰は

元寇防壘の遺蹟　（福岡縣糸島郡今津）

忙殺　バウサツ。バウサイ。非常にいそがはしい。

三宅雪嶺　名は雄二郎。文學博士。評論家。萬延元年生。

ずして勝ちしより、竟に武を海外に用ひず、徒に國内の紛爭に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極といふべし。

元は一敗して後、更に再擧を圖らむとせしが、諫むる者ありて、事遂に止めり。智とすべきなり。この一役に於てだに、海岸到る處造船の音喧しく、爲に費せるところ莫大の額なりきと傳ふ。故を以て、若し一敗に懲りずして再擧を圖り、一層の準備を整へて我が國に來寇せば、彼、其の國力の底を傾くるに至りしは疑ふべからず。何ぞ八十年後の分割を待たむや。

（三宅雪嶺―小泡十種）

黄金もて月日をうちし高旗になびかぬ國はあらじとぞ思ふ

（伴林光平）

門閥

端的　徹底的

スポーツ　Sports　競技。

デモクラチック-スピリット　Democratic spirit　平民的精神。

九　競技精神

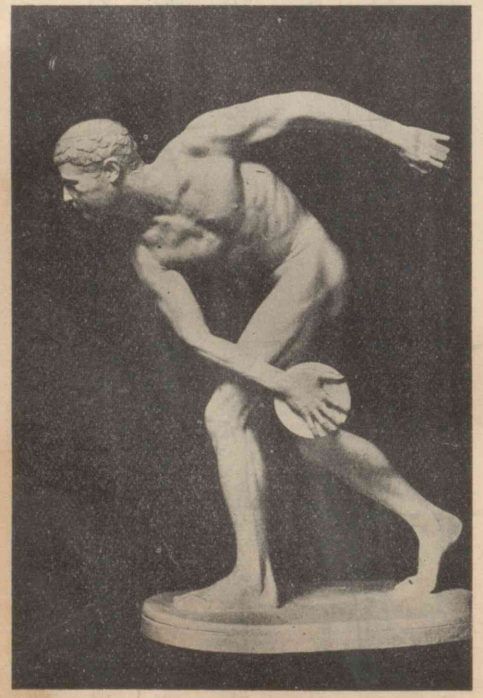
競技には、權勢もなく、門閥もなく、情實もなく、財力もない。全く裸一貫の身體と身體がぶつつかつて、眞劍に、誠實に、無邪氣に、火花を散らして戰ふのである。さうして眞に強い者が勝ち、眞に弱い者が負けるのである。これくらゐ如實に、端的に、徹底的に、眞を發露するものは外にない。隨つて競技が眞理を愛する者、誠の道に從ふ者に取つて無上の喜であることは、申すまでもない。かくて眞を冀ふ希臘人をしてスポーツの國民たらしめたのである。また希臘の文化には、デモクラチック-スピリットが何處までもその基調を成してゐる。この意味に於て、最もデモクラチックな精神を啓發する者として、競技が喜ばれた。

思ふに、競技には年齢の相違もなく、身分の高下もなく、職業の差別もなく、見る者も、見らるゝ者も、悉く皆、同一の時、同一の場處で、同一の嗜好の下に打寄つて、我も人も、平等一如、悉く皆清い、美しい趣味のために融け合つてしまふ。この意味に於て希臘人は甚だ競技を好んだのである。競技は善を求むる人間の本性に對して、一道の力強い光明を與へるものといはなければならない。何となれば、競技を行ふに際して、人間本然の德性、卽ち善の性質が迸り出づべき多くの機會が惠まれるからである。

雪を凌ぎ霜に耐へて、凛として咲き出づる梅の花にも、優にやさしい香があるやうに、血涌き肉躍り、龍拏虎攫、火花を散らして鬪ひつゝある間にも、自ら競技道德の發露がある。その間に滾々たる友愛の情が涌き、懷かしい謙讓の德が流れ出る

龍拏虎攫　リヨウジヨコクワク。龍の如く捕へ虎の如くつかむ。猛烈な爭鬪などを形容する語。

滿場闃として聲なく、固唾を呑み息を凝らして控へてゐる幾千の應援者、幾萬の觀客の前に、凛々しく立並ぶ選手を見ては、戰はざるに既に早く涙ぐましい氣分が涌く。應援者が選手の心を汲み、選手が應援者の心に感激する時、勝つも涙、負けるも涙、この清い溫かい涙の中に、一切の世間的、功利的の利害得喪を超越した、純眞無垢の情緒が流露する。そしてこの清い溫かい涙の中に、純眞無垢の情緒の中に、我も人も思ふさま浸ることが出來るのである。かゝる清い享樂、純



圓盤投

闃として

功利的

利害得喪

情緒　ジヤウショ。英語 Emotion の譯。觀念に伴なひて起る稍〻複雜なる感情。

な氣分は、現今競技を措いて他に何物を以て代へることが出來るであらうか。文化が進むと共に、生存競爭が愈〻烈しくなり、うき世の中が益〻せち辛くなつて來る今の時に於て、暫時なりとも、かういふ齷齪たる世の塵から脫れ出て、この綺麗な、無垢な境地に心を遊ばすことが、どれだけ善を冀ふ人間の本性に大いなる慰安と光明とを與へるであらうか。善を希求する希臘人が、いたく競技を喜んだのは當然のことであつた。

競技によつては、なほ幾多の德性が涵養される。個人と個人と對立して技を爭ふ時、眞に電光石火、寸分の隙も許されない。かくの如くして勇氣・果斷・克己・忍耐・敏捷・自信・努力等、人間が人間として世に處し事に當る上に、最も大切な幾多の德性の養成せらるべき機會が、競技によつて惠まれる。更に又團體競技を行ふに當つては、協心・節度・責任・義務・服從といふやうな、人間が社會生活をなし相互扶助を行ふ上に於て、缺くべからざる幾多の麗しい德性が培はれるのである。かくの如くして、競技によつてフェローフィーリングを高潮すべき機會が與へられる。そしてこのことが、一國家として、一民族として、其の隆昌進運を來す上に、どれだけ大切であるかは、今更言ふを俟たないのである。

（永井　潛―人及び人の力）、

齷齪
涵養
電光石火　いなづまの光と石を打つて出る火。非常にはやいことに喩へていふ。
フェロー・フィーリング　Fellow-feeling　同情。思ひやり。
永井　潛　醫學博士。東京帝國大學教授。廣島縣の人。明治九年生。

須賀直見がいひしは、「廣く大きなる書を讀むは、長き旅路を行くが如し。おもしろからぬ處も多かるを、經行きては又面白く目醒むる心地する浦山にも至るなり。又足强き人は早く、弱きは行くこと遲きも、よく似たり。」とぞいひける。をかしきたとへなりかし。

（本居宣長―玉かつま）、

マッターホルン Matterhorn アルプスの一峰。瑞西・伊太利の國境にあり。海拔四四八二米。

オベリスク Obelisk 方尖碑。

遼遠 レウエン。

憧憬 ドウケイ。ショウケイ。

忽然

一〇　マッターホルン登山

今は心も身も渾然として高鳴りしてゐるのだ。明日はその緊張を提げてマッターホルンに向はうとしてゐる。宵闇に傲然として肩を聳えさせて立つてゐる巨人マッターホルンだ。巨大なる斷崖のオベリスクは私を下瞰して、胸の底まで見透してゐる。大空に戰を挑んでゐる强大な生命の姿である。私は不可能と思つてゐる遼遠な憧憬が、目の當りに忽然として現れたやうな困惑を感じた。そして其の戰く胸の波をじつと抑へて、彼と取り組むのだ。」と繰返して云つた。

私は起きるとすぐ、階下に下りて行つた。窓の外を見上げると

ザイル Seil 綱。

間隙 カンゲキ。

ピッケル Pickel 登山用の杖。

マッターホルン

星の降るやうな空だ。午前三時、我等三人はザイルで結び合うて出た。寢床のほとぼりの未だ去りきらない總身に、寒天は冷水一斗の覺醒を與へる。山ランプのゆらぐまゝに足下に注意を拂つて登りだした。

巨人は默然として太古のまゝの凝思の姿だ。この堅い姿を三人は岩より岩へ、間隙より間隙へと傳ひ、山稜より離れて東面の崖を登つて行く。初めから岩登りであるが、岩が頗る固いので足場にも手を懸けるにも確實で些の不安がない。

岩の間隙に雪が凍り付いてゐるのを、ピッケルで碎いて手を懸

庇

ける隙を作る。私はかゝる時の用意に指先を切つた皮の手袋を使ふ。三人はひた登りに登る。四時過ぎであつたらうか、一面にうす明るくなつて來て、私等の動作が互に目に付くやうになつて來た。かうなると氣の毒なのはランプだ。ランプは、闇の中の導者だ。一帶が其の程度の明るさになる時に、ランプは自ら力が減つてその存在を失ふのだ。

五時、正に巨人の頂は天上の光を受けて赫と燃えた。其の光の足が驅けるやうに下りて來る。私等は其の間に、此の山に未だ小屋がなくて露營した時分の岩小屋の跡を過ぎた。それは岩塊の庇の下に石を積んだものであつた。故國での現在の小屋の樣と少しも違はない。後から來る者は完全の恩惠に浴する。然し先人の苦勞と心氣とは味はふことが出來ないのだ。

爛々　ランラン。

アルペン　Alpen　こゝではアルプスの連峰をさす。

遂に私等も黎明の光に浴した。爛々たる大日輪が燃え昇つて正面に面した。足下に千尺の斷崖が懸つてゐる。その崖の面を日光が下へ這つて行く。すると山鴉の一群が聲をたてゝ鋭く舞うた。

午前六時、ゾルヴェー小屋に著く。山稜を削つて建てた二間四方位の嚴丈な小屋である。海拔四千米と覺えてゐる。おそらくアルペン中最高に位する小屋であらう。それはマッターホルンが極めて天候の變化の激しい上に、峻險なるため、その避難を主たる目的として作られたものだ。この小屋はベルギーの人ソルヴェー氏の寄贈するものであつて、同氏の肖像が屋内に掲げてある。マッターホルンに於ける雷は有名なものだ。小憩、紅茶を沸かし食物を撮る。

登山に長休みは禁物である。これより登攀更に急を加へて來る。殆ど直立になつてゐる場處がある。然し太い繩が懸けてあるので、それを便りに容易に登る。私等は山稜に出でて攀ぢ登り出したが、山稜は極めて鋭く且屹立してゐる。しかし此の難しい場處にも、鎖や繩が三四個處懸けてあるので、苦もない。只其の繩にぶら下つて脚下を見ると、北面の崖下に縱横にクレヴァスの入つたマッターホルンの氷河が日に輝いてゐる。而も私等三人が此の繩に安心して釣り下つて登

岩登り

つた時である、其の繩を岩に止めた根元が、鋭い岩の角で指の太さ程に摩り切れてゐるのを認めた。フリッツは下の小屋の番人の不注意をいたく怒つた。そして其の細つた繩を、メスで切り離してしまつた。

やがて所謂肩と稱する一段に達した。今迄の斷崖よりは傾斜の減じた積雪の稜である。其の上に足場の少ない岩面に達した。岩面の僅かな間隙も氷に埋められてゐる。一八六五年の夏、ウィムパーの一行七名中四名が落死したのは此處だと思ふ。

而も私等には其處に鎖があつた。やがて又雪稜に足場を切つて、忽ちにして頂に達した。頂は積雪の殆ど水平な狹い稜であつて、約百米も東から西へ走つてゐる。その東西兩端が一段高くなつて、東を瑞西國の頂、西をイタリヤの頂とする。イタリヤの頂の

近くに、鐵の十字架が立つてゐる。

私等が頂上に達したのは朝の十時過ぎであつた。新らしい雪の上に跡を印して頂に立つた。

實に靜かな無風な、晴朗な日和である。幾十幾百の鋭い岩と雪との山の波が、見渡す限り起伏した。そして起伏して輝いた。東から北へ、北から西へと、モントローザ・ドーム・ベルナーオーバーランド、それからモンブランと云ふ巨人達は、雪や氷河を頂いて立つてゐる。ニコライ谷の綠の中にはツェルマットの村が手に取るやうに見える。そして山も谷も氷河

アルプスの連峰

メロン
Melon　甜瓜。

槇有恒
登山家。仙臺の人。明治二十七年生。

も牧場も一齊に自分のものとなつた。何處の人何處の國の所屬であつても好い。然し此の小さい胸は、今は其のすべてを領有することが出來るのだ。南方イタリヤの野はさすがに暖風の渡るのであらうか、雲の海であつた。

私は默然として四周に見入つた。フリッツとブラヴアンドとは、東北に遠い故郷のベルナーオーバーランドを指して頻りに其の峯々の名を求めてゐる。私等は、日を浴びながら、擔つて來たメロンを割つた。其の香り高い滴りは四散して幾百十の險峯の上に薫つた。

（槇有恒―山行）

山外に山あつて山盡きず、路中に路多うして道きはまりなし。山青く山白くして雲來去す。

（謠曲「熊野」）

一一　山を慕ふ心

鮮かな雪を戴き、朝日を浴びつゝ、地平線上に雄偉なる姿を浮べてゐる山相は、自然が作つた最も偉大なる藝術である。幾度眺めても仰いでも、それは見る人に雄々しい心と、氣高い理想と漲る血潮とを與へなければ止まない。山の姿ほど、無私な心を以て、清淨な魂を以て、憧憬し得られるものはない。

山を憧憬し、その姿にみづからを虛しうすることの出來る心に、純眞ならざるものはない。山を求める心は、この偉大なる自然の藝術を通じて、自然の魂と融けあひ、それが最も活きた力であることを感ずる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして絕えず行はれてゆく。

アルプス
Alps

文藝復興期
ルネッサンス
Renaissance
十四世紀より十六世紀にかけて歐洲の思想界に一大革命起り、文物學藝の上に著大なる進歩を劃したる時代。

浪漫的時代
ロマンチシズム(Romanticism)の隆盛なりし時代。ロマンチシズムとは、十八

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと思惟する文學者を、多く持つてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの方面に於ても、僞善と常識とに目立ち、創造と感激とに乏しい時代であつた。また歐洲歷史上、自然に對して深い憧憬をもつた時代は、最も意義ある時代であつた。ギリシヤ文化の歷史に於て最も光輝ある文學・藝術を生み出した時代、また文藝復興期、十八世紀末から十九世紀の初めにかけての浪漫的時代は何れもそれであつた。

日本の歷史に於て、自然を最もありのまゝの姿に於て讃美し、氣高い山の姿に限りない渴望の眼を投じた時代があつた。それは日本民族の最もあからさまな、最も淸純な情緒の源泉ともいふべきかの萬葉人の時代であつた。その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は、餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一

世紀より十九世紀初頭にかけて獨逸に起り、歐洲各國に擴まりし文學上の一流派。

つの傳統となつて、民族の一部には、登山の風習は絶えることなく行はれてゐた。しかし、明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。即ち大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり、凄じい勢ひを以て、社會の各方面に動いてゐる。

かくして、あそこの山、こゝの溪谷は攀ぢられ、探求された。今まで顧みられなかつた文獻が引出され、山岳・溪谷に關する傳説が求められるに至つた。昔から登ることが不可能だとされてゐた山、足を蹈み入れることの出來ないと思はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、究められないところが殆どなくなつた。

しかし山を眞に愛する人には、山を究め、溪谷を探り終へるといふことは、彼の山に對する喜悦の一小部分に過ぎない。彼の喜悦の大部分は、彼がこれらの自然に對して抱き得る無限の主觀的な情緒に存してゐる。いつまでも〳〵同一の山、同一の溪谷に對してすら涌出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、かくして絶えず向上し、進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

主觀的

一つの山が持つ溪谷・深林、その麗しい色調、その朝夕の光線によつて全容に與へる變化、一歩々々を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多樣、そしてこれらの現象の中を流れる自然の生命の動きを認め、それに耳を立てることをしないものは、一度頂上を究めると、その山に對する興味を失ふ人と共に、自然を機械的に見る人でなければならない。

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言葉の一つである。山に憧憬する人の抱く心は、いつも自然との一致融合でなければならない。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することでなければならない。

私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋渉に存するのではなくして、飽くまで主觀的に質的に、山岳に對して深まり行く情緒に存することを、深く信ずるものである。その意味に於て、山を愛するものにとつては、登山は山を登り盡すといふことで、決して行詰るものではないことを、私は茲に斷言したい。

（田部重治―山と溪谷）

跋渉　バッセフ。山川を歩きまはること。

田部重治　法政大學教授。富山縣の人。明治十七年生。

一二　東海の富士

旅順にて黃金山を攀ぢし時、旅順要港部の司令官黑井海軍中將我を導く。將軍善く談ず。話柄歐西の天に飛ぶ。曰く、「伊太利にてベスビオ山に登りし時、一獨人と路づれとなりしが、彼は突然、君は幾度富士山に登りしかと問ふに、一度登らぬも馬鹿、二度登るも馬鹿と答ふれば、富士山の如き立派なる山は、世界に二つとなし。余は四回登れり。日本に生れて、唯一度しか登らぬとは、さて〳〵勿體なき事なりと笑はれき。」とて哄然として打笑ひぬ。余も知らず識らず笑ひぬ。

高さをいはゞ、ニューギニヤのヘルキュールス山の如きは、三萬二千七百八十呎、殆ど我が富士山に三倍す。されど正しき圓錐形

黑井中將　名は悌次郎、今は大將。

ベスビオ山　Mt. Vesuvius　普通ベスビヤスといふ。伊太利のネープルス灣東岸の活火山、海拔一二二五米。

ニューギニア　New Guinea I.　濠洲の北方、世界第二の大嶋。

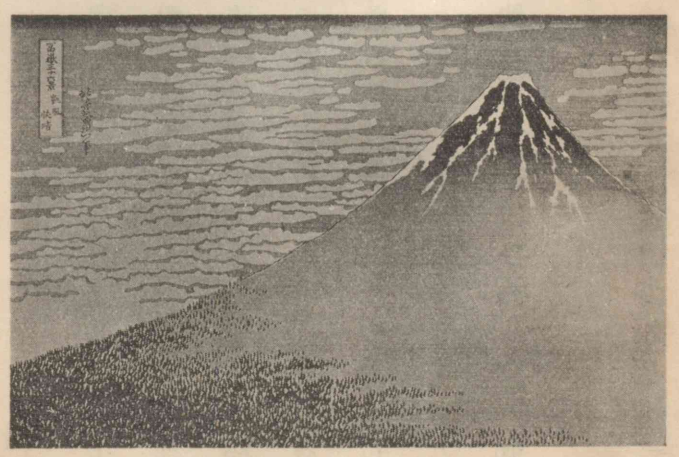
を成し、偉大にして秀靈を極むること、世界中富士に比すべきものなし。

富士は、妙高・戸隱・立科・八が嶽・箱根・天城など、所謂る富士火山帶の盟主にして、たると共に、日本山嶽の盟主にして、ほゞ日本の中央部に位せるが、山又山の奥に隱れず、東海に接して、周圍に裾野を控へ、四面其の形を改めず、近く之を一周するを得べく、展望二十一國の多きに達す。日本中の佳景といへば、多くは富士の見ゆる處なり。他の條件は具備せりとも、富士見えずしては、何となく物足

戸隱・立科・八が嶽　何れも長野縣にあり。

箱根　神奈川・靜岡二縣に跨れる山。

天城　靜岡縣伊豆半島にあり。



凱風快晴　北齋筆

樹有るを云々　實語教の句。「山高、故不レ貴、以レ有レ樹爲レ貴。人肥、故不レ貴、以レ有レ智爲レ貴。」

山にして云々　賴山陽耶馬溪圖卷記の句。

香川景樹　江戸時代の歌人。桂園と號す。天保十四年歿。年七十六。（一七八―一八四二）

らぬ心地せらる。

湖上の富士

「山は必ずしも高きを貴ばず、樹あるを貴ぶ。」といひ、又「山にして水を得ずんば、生動せず。」といへるが、これ普通の山のことなり。一萬二千五百尺の富士山となれば、樹に超脫し、水に超脫す。高いかな富士の山、全山を十合にわかつ。麓の一合、既に附近群峰の上に在り。香川景樹の、

群山の高嶺高嶺を傳ひ來て
富士のふもとにかゝる白雲

は、げに實況なり。脚底に雲を見、雷を聞きつゝ攀ぢ行けば、下界を離れて天に登る心地す。

頂上よりは、近く伊豆・相摸・駿河・甲斐・信濃の山々を見下し、駿河灣を見下し、相摸灘を見下し、遠州灘を見下し、又遙かに上總・下總の彼方なる太平洋を見下す。朝、太陽の直ちに海より出づるを見るべし。殊に下界をおほひ盡したる雲の海の果より太陽の昇るを見れば、何人か神聖の感に打たれざらむ。氣澄みて月近し。手を伸ばさば屆かむかと思はる。李白が、

不敢高聲語、恐驚天上人。

の感も起るべく、下河邊長流の、

富士の嶺に上りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり

李白　支那唐時代の有名なる詩人。

下河邊長流　江戸時代初期の國學者。貞享三年歿。年六十四。（一二二八三―一三四六）

白玲瓏

藤田東湖　名は彪。水戸藩の儒者。安政二年（一二五一五）の江戸の大地震に壓死す。年五十。（一二四六六―一二五一五）

の感も起るべし。

普通一般に日本國民が神聖の感に打たるゝは、二重橋外より皇居を拜する時なるべし。若しくは水清き五十鈴川の彼方、鬱蒼たる神路山の前に、大神宮を拜する時なるべし。之を自然界に求むれば、白玲瓏の富士を仰ぐ時なるべし。萬世一系の天皇は、人にして神におはす。神のしらす日本は神州なり。藤田東湖は、神州の正氣を歌ひて、

秀爲不二嶽。

といへり。日本に山は多けれども、神州にふさはしき山は、富士の外に求むべからず。東海に特立して、白玲瓏たる姿は、げに神州の山なり。富士山は秀麗なり、正大なり、清淨なり。凛として氣高き態あると共に、溫にして親むべき趣ありて、神州の氣象を代表す。

大和魂地に凝つて富士山となれるか、富士山人に凝つて大和魂となれるか。世界觀光の客なほ富士に傾倒す。神州の國民は、何人も富士と默契あるべき筈なり。

默契　言はず語らずの中に自然一致すること。

野を行きても、山に入りても、海に浮びても、富士を見れば何となくゆかしくて、一種、神に接する感有り。太田道灌は、

太田道灌　武人。江戸城の創設者。文明十八年歿。年五十五。（二〇九二―二一四六）

我が庵は松原つゞき海ちかく富士のたかねを軒端にぞ見る

と歌ひたるが、何はさておき、富士を窓に入るゝ家こそ、日本人の理想の住ひなれ。煤煙立ち昇る煙突の間にも、富士だに見ゆれば、工業地も、詩の國となる。電車・自動車旁午して、電線空に蜘蛛の巣を張れる市街の中にも、富士だに見ゆれば、都會も繪の國となる。鳥居の上に富士見えて、祠は愈〻靈に、尾花の末に富士見えて、野は益〻懷

旁午　バウゴ。往來の多きこと。

かし。富士の高趣は、古來描いて描く能はず、歌うて歌ふ能はず。富士たゞ默々として大空に自然の繪を展べ、自然の詩歌を綴る。

五湖　山中・河口・西・精進・本栖。

世には眺めてよき山あり、登りてよき山あり。富士や、眺めてもよく、登りてもよし。山を見下し、野を見下し、近く五湖を見下し、遠く太平洋を見下す。雲と路を爭ひて登り、渴して千秋の雪を掬す。頭上に明月を戴きながら、脚底に雷鳴を聞く。飛鳥はたゞ背を見る。動物も追隨する能はず。天地蓬々として何處ともなく仙樂を奏す。

大町桂月　名は芳衞。文章家。大正十四年歿。年五十七。

（大町桂月―富士行）

天の原照る日に近き富士のねに今も神代の雪は殘れり

（橘枝直）

心あてに見し白雲は麓にておもはぬ空に晴るゝ富士のね

（村田春海）

一三　興國の樅

デンマルク（Denmark）（丁抹）北歐の一小國。

デンマルク本國は、決して富饒の地と稱すべきではないのであります。國に一鑛山あるでなく、大港灣の萬國の船舶を延くに足るものがあるのではありません。デンマルクの富は主として其の土地に在るのであります。其の牧場と、其の家畜と、其の樅と白樺の森林と、其の沿海の漁業とに於て在るのであります。殊に其の誇りとする所は、其の乳產であります。其の乳油（バター）と牛酪（チーズ）とであります。デンマルクは實に牛乳を以て立つ國であり、また柔和なる牝牛の產を以て立つ、小にして靜かなる國であります。

然るに、今を去る數十年前のデンマルクは最も憐れなる國でありました。千八百六十四年に獨墺の二强國の壓迫する所となり、

腦漿（ナウシャウ。なうみそ。轉じて智慧。）

其の要求を拒みたる結果、終に開戰の不幸を見、デンマルク人は善く戰ひましたが、弱は以て强に勝つ能はず、戰敗れて再び起つ能はざるに至りました。而して敗北の賠償として獨墺の二國に南部最良の地方を割讓しました。如何にして國運を恢復せんか、如何にして敗戰の大損害を償はんか、此の時に方り、デンマルクの愛國者が其の腦漿を絞つて考へた問題はこれでありました。國民の精力は斯かる時に試さるゝのであります。戰は敗れ、國は削られ、國民の意氣は銷沈し、何事にも手の著かざる時に、斯かる時に國民の眞の價値は判明するのであります。戰勝國の戰後の經營は、どんな詰らない政治家にも出來ます。國威宣揚に伴なふ事業の發展は、どんな詰らない實業家にも出來ます。難いのは戰敗國の戰後の經營であります。國運衰退の時に於ける事業の發展であり

幽暗

ます。戰に敗れて精神に敗れない民が、眞に偉大なる民であります。宗教と云ひ、信仰と云ひ、國運隆盛の時には何の必要も無いものであります。然しながら國に幽暗の臨んだ時に、精神の光が必要になるのであります。國の興ると亡ぶるとは、此の時に定まるのであります。どんな國にも、時には暗黑が臨みます。其の時之に打克つことの出來る民が、永久に榮ゆるのであります。恰も疾病の襲ふ所となつて、人の健康がわかると同然であります。平常の時には弱い人も強い人と違ひません。疾病に罹つて、弱い人は斃れて、強い人は存

デンマルク製乳場

ダルガス Enrico Mylius Dalgas

ユットランド Jutland デンマルク半島の名。

沃饒 ヨクゼウ。土地が肥えて產物の多きこと。

るのであります。其の如く、眞に強い國は國難に遭遇して亡びないのであります。其の兵は敗れ、其の財は盡きて、其の時尙起るの精力を蓄ふるものであります。これは誠に國民の試錬の時であります。此の時に亡びない彼等は、運命の如何に關はらず永久に亡びないのであります。

茲にダルガスといふ工兵士官がありました。齡は今三十六歲、工兵士官として戰爭に臨み、橋を架し、道路を築き、溝を掘るの際、彼は細かに彼の故國の地質を研究しました。而して戰爭未だ終らざるに、彼は既に彼の胸中に、故國恢復の策を立てました。卽ちデンマルク國の歐洲大陸に連なる部分にして、其の領土の大部分を占むるユットランドの荒漠を化して、之を沃饒の地となさんとの大計畫を、彼は既に彼の胸中に立てました。故に戰敗れて、彼の同

復讐戰
フクシウセン。

僚が絶望に壓せられて、其の故國に歸り來つた時に、ダルガス一人は其の面に微笑を湛へ、其の首に希望の春を戴きました。

「今やデンマルクに取り惡しき日なり。」

と彼の同僚は言ひました。

「誠に然り。」

とダルガスは答へました。

「然しながら、我等は外に失ひし所のものを內に於て取返すことが出來る。君等と余との生存中に、我等はユットランドの曠野を化して、薔薇の花咲く處となすことが出來る。」

と彼は續いて答へました。他人の失望する時に、彼は失望しませんでした。彼は、彼の國人が劍を以て失つた物を、鋤を以て取返さうとしました。今や敵國に對して復讐戰を計畫するに非ず、鋤と

夢想家

鋤とを以て殘る領土の荒漠と鬪ひ、之を田園と化して、敵に奪はれた物を補はうとしました。

然しダルガスは單に夢想家ではありませんでした。工兵士官なる彼は、土木學者であつたと同時に、又地質學者であり、植物學者でありました。彼は斯くの如くにして、詩人であつたと同時に、又實際家でありました。彼は理想を實現するの術を知つて居りました。

ユットランドはデンマルクの半分以上であります。而して其の三分の一以上が不毛の地であつたのであります。面積一萬五千平方哩のデンマルクに取りましては、三千平方哩の曠野は、過大の廢物であります。之を化して良田沃野となして、外に失つた所のものを內に在つて償はうとするのが、ダルガスの夢であつたの

であります。而してこの夢を實現するに方つて、ダルガスの執るべき武器は唯二つでありました。其の第一は水であり、其の第二は樹でありました。荒地に水を漑ぐを得、之に樹を植ゑて、植林の實を擧ぐるを得ば、それで事は成るのであります。事は至つて簡單でありました。然し、容易ではありませんでした。

今より八百年前の昔には、其處に繁茂せる良き林がありました。而して降つて今より二百年前までは、處々に槲の林を見ることが出來ました。然るに文明の進むと同時に、人の慾心は益〻增進し、彼等は土地より取るに急にして、之に酬ゆるに緩でありました故に、地は時を追うて益〻瘠せ衰へ、終に數十年前の憐れむべき狀態に立到つたのであります。然し人間の强慾を以てするも、地は永久に殺すことの出來ないものであります。神と天然とが示す或適當

漑ぐ

シルレル Schiller ドイツの詩人。(一七五九―一八〇五)

壞敗

の方法を以てしますれば、此の最惡の狀態に於てある土地をも、元始の沃饒に返すことが出來ます。誠に詩人シルレルの言つたやうに、天然には永久の希望あり、壞敗は之をたゞ人の間に於てのみ見るのであります。

デンマルクの農業

先づ溝を穿つて水を注ぎ、ヒーズと稱する荒野の植物を驅逐し、之に代ふるに馬鈴薯或は牧草を以てするのであります。此の事は左程の困難ではありませんでした。然し難中の難事は、荒地に樹を植ゑることでありました。此の事に就いて、ダルガスは非常の苦心を以て研究しました。而して彼の心に思ひ當りましたのは、ノルウェー產の槲でありました。是は

ユットランドの荒地に成育すべき樹であることは分りました。然しながら實際之を試驗して見まするとと、思ふ通りには行きません。樅は生えまするが、數年ならずして枯れて了ひます。ユットランドの荒地は、今や此の强健なる樹木をさへ養ふに足るの養分を殘しませんでした。

然しダルガスの熱心はこれがためには挫けませんでした。彼は、天然は亦彼に此の難問題をも解決して呉れる事と確信しました。故に、彼は更に研究を續けました。而して彼の頭腦にふと浮び出したことは、アルプス產の小樅でありました。若し之を移植したならば如何と彼は思ひました。而して之を取來つて、ノルウェー產の樅の間に植ゑました時に、不思議なるかな、兩種の樅は相竝んで生長し、年を經るも枯れなかつたのであります。茲に於て

釋く

野心的慾望

大問題は釋けました。ユットランドの荒地に始めて綠の野を見ることが出來ました。綠は希望の色であります。ダルガスの希望、デンマルクの希望、其の民二百五十萬の希望は實際に現れました。

しかし問題は未だ全く釋けませんでした。綠の野は出來ましたが、綠の林は出來ませんでした。ユットランドの荒地より建築用の木材をも伐り得んとの、ダルガスの野心的慾望は、事實となつて現れませんでした。樅は或る程度まで成長して、それで成長を止めました。其の枯死はアルプス產の小樅の併植を以て防ぎ得ましたけれども、其の永久の成長は之に由つてとげられませんでした。

「ダルガスよ、汝の豫言せし材木を與へよ。」

と言つて、デンマルクの農夫等は彼に迫りました。彼の長男をフレデリック-ダルガスといひました。彼は父の質を受けて善き植物學者でありました。彼は樅の生長に就いて大なる發見を爲しました。若きダルガスは言ひました。大樅が或程度以上に成長しないのは、小樅を何時までも大樅の側に生やして置くからである。若し或時期に達して小樅を伐り拂つて仕舞ふならば、大樅は獨り土地を占領して、其の成長を續けるであらうと。而して若きダルガスの此の言を實際に試して見ました所が、實に其の通りでありました。小樅は或程度まで大樅の成長を促すの能力を持つて居ります。然し其の程度に達すれば、却つて之を妨ぐる者であるとの奇態なる植物學上の事實が、ダルガス父子に由つて發見せられたのであります。而も此の發見は、デンマルク國の開發に取

挽回　バンクワイ。とりかへす。

四六時中

つては實に絶大なる發見でありました。之に由つてユットランドの荒地挽回の難問題は解釋されたのであります。これよりして、各地に鬱蒼たる樅の林を見るに至りました。

然し植林の效果は、單に木材の收穫に止まりません。第一に其の善き感化を蒙りたる者はユットランドの氣候でありました。樹木の無き土地は熱し易くして冷め易いのであります。故にダルガス植林以前に於ては、ユットランドの夏は、晝は非常に暑くして、夜は時に霜を見ました。四六時中に熱帶の暑氣と初冬の霜とを見るのでありますから、植物は堪つたものではありません。其の時に方つて、ユットランドの農夫が收穫成功の希望を以て植うるを得た植物は、馬鈴薯・黑麥、其の他少數のものに過ぎませんでした。然し植林成功後の彼の地の農業は一變しました。夏期の降

霜は全く止みました。今や小麥なり、砂糖大根なり、北歐產の穀類又は野菜にして成熟せざるものなきに至りました。ユットランドは大樅の林の繁茂の故を以て、良き田園と化しました。木材を與へられた上に、良き氣候を與へられました。

然し植林の善き感化は之に止まりませんでした。樹木の繁茂は海岸より吹送る所の砂塵の荒廢を止めました。北海沿岸の特有の砂丘は海岸近くに喰止められました。北海に瀕する國に取つては、敵國の艦隊よりも恐るべき砂丘は、戰鬪艦ならずして、綠の樅の林を以て、茲に美事に擊退されたのであります。

霜は消え、砂は去り、其の上に第三に洪水の害が除かれたのであります。これ何處の國に於ても、植林の結果として直ちに現るゝものであります。勿論海拔六百尺を以て最高點となすユットランドに於ては、我が邦のやうな山國に於て見るが如き洪水の害を被ることはありません。然し比較的に少き此の害すら、ダルガスの事業に由つて免るゝを得たのであります。

斯くの如くにして、ユットランドの全州は一變しました。廢れた市邑は再び起りました。新に町村は設けられました。地價は非常に騰貴しました。或る所に於ては四十年前の百五十倍に達しました。道路と鐵道とは縱橫に敷かれました。我が四國全島に更に一千平方哩を加へたるユットランドは復活しました。戰爭に由つて失つたスレスウィグとホルスタインとは、今日已に償はれて尙餘りあるとのことであります。

然し木材よりも、野菜よりも、穀類よりも、畜產よりも、更に貴いものは國民の精神であります。デンマルク人の精神は、ダルガスの

植林成功の結果として茲に一變したのであります。失望せる彼等は、茲に希望を恢復しました。彼等は國を削られて、更に新に良き國を得たのであります。而かも他人の國を奪つたのではありません。己の國を改造し得たのであります。

（内村鑑三―デンマルク國の話）

内村鑑三　思想家。昭和五年歿。年七十。

すべて善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結べり。善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざるなり。凡そ善果を結ばざる樹は斫られて火に投げ入れらる。是故に其の果に由つて之を知るべし。

（新約全書）

一四　希望の海

青い空を映す海は
希望に燃えた吾々の心だ。
はてしなく、かゞやかしく、
曇なく、底しれず、
たゝへた波のすゝむ果に、
われらの望むところの
彼方の岸がある。

さへぎるものもない
ゆたかな力の漲る海！

微風の羽ばたきと、
きらめく日光と、
走る船の帆のかゞやき、
海はあらゆるものをのせて、
その重みを知ることなく、
みづからの歩みを、
しづかにのたうつ。

あゝ自由と力の大洋！
いつも輝く海、いつも動く海、
その果に、そのかなたに、
希望の岸はよこたはる。

（川路柳虹―預言）

川路柳虹
本名は誠。畫家。詩人。東京市の人。明治二十一年生。

藥師寺　塔

巍然
雲漢
映發
舍利
シャリ。梵語の釋迦の骨。Sarria

一五　塔

寺院を訪うて其の境内に入ると、何よりも先に目に入るものは塔である。否、寺の境内に入るまでもなく、遠くから見て林梢を拔き、巍然雲漢に聳えて、寺の所在を語るものは塔である。樹木の多い我が國にあつて、寺院の高い塔が天を摩して、其の赤く塗つてある色が綠なす樹木と映發する趣は、如何にも崇高に感ぜられる。

塔は或意味に於て寺の廣告のやうなものだ。本來塔には舍利が置かれ、聖靈の祀られてゐる處であるから、塔は崇拜の中心で、昔は必ず本堂の前面に設けたと云ふが、佛教が追々衰微に赴くにつれて、塔の本義を失ひ、恰も裝飾であるかの如くに取扱はれ、其の位置なども亂れて來たけれども、本來、寺に最も大切なものは塔であ

憂身を寠す

つたのだから、其の結構に工人が憂身を寠したもので、今日、塔は猶建築美術の範とされてゐる。漫然見れば、どの塔も似たり寄つたりで、層の數に最も目が注がれ、高い塔ほど俗衆に喜ばれる傾があるが、じつはそんな單純なものではない。年代に依り建築に特徴があり、形式も異つてゐる。渡邊省亭が修業時代に、其の師菊池容齋に伴なはれて谷中の天王寺を同覽し、歸宅後、塔の某層に就いて所見を師より問はれて、省亭はそれが答へられず、泣かされた話も殘つてゐる位で、相當に注意を拂へば、見遁すことの出來ない特徴があるのである。奈良の諸刹は佛教隆盛時代のものであるから、

渡邊省亭
畫家。大正七年歿。年六十八。

菊池容齋
畫家。「前賢故實」十卷を著す。明治十一年歿。年九十一。

法隆寺の五重塔

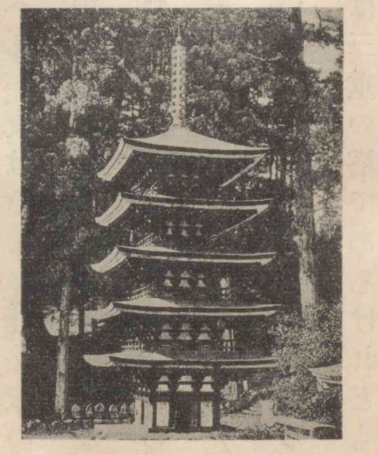
法隆寺

藥師寺

建築法も極致に達してゐる。法隆寺の五重の塔などは、建造に頗る用意があつて、上層ほど段々屋根が小さくなつてゐて、最下の臺とも見るべき堂が割合に大きいから、坐りがよく、屋根が輕いやうに見えて、安全であるかの感じを與へるが、實はそこに建築家の意匠がある。後世の塔は、上層・下層・屋根の廣がりが、上ほど狹くなつてゐるけれども、際立つて差を覺えない位であるから、さながら直立の烟突を見るが如く、不快を覺える。屋根の構造にもいろ〳〵の工夫があつて、古い塔には頗る技巧を弄してある。藥師寺の東塔は、よく引合に出るものだが、あれは三重の塔であるけれども六重の塔のやうに見える。其の構造の大略を云ふと、各層の間に中二階の樣なものがあつて、それに庇が出てゐるので、層が倍數に見えるのだ。此の作り方は、甚だ趣がある。又屋根の構造にも、いろ

いろ意匠があつて、大抵は外反（そつり）であるのに、内反（うらそり）のもある。室生寺の五重の塔の屋根は、此の樣式で作られ、甚だ趣はあるが、製作はむつかしいに相違ない。兎角、莊重に見せると否とに優劣があるので、高い塔が決してよいとは限らない。十三重の塔などは危なげに見えて、莊重の趣は全く無い。畢竟、頂上も最下も各層の大さが餘り異つてゐない爲めに、直立した柱でも見る如くで、唯危なく感ずるのみである。塔の建築に何より大切であるのは、釣合の調和だ。末世の塔は、どれを見ても釣合を失してゐる。

又塔の上頭に裝置する金屬で作つた螺旋のやうに見えるもの



室生寺の五重塔

結構

八坂　京都市。

がある。これは九重してゐるので九輪と云ひ、その上部に水烟と云ふものを裝置する。これを塔の上頭に裝置することは面白い意匠であるが、これも塔の高さとよく釣合が取れないと、塔の美しさを毀す。別して十層以上もある塔に之を取り附けるには、釣合を取ることが甚だ困難で、名工の工夫に待たねばならぬ。藥師寺の東塔にも此の水烟が取りつけられてゐるが、流石によく釣合が取れてゐる。尙又下から仰いで見ては分りもしないが、專門家の說く所に據ると、此の塔の水烟の頂上には蓮の蕾があつて、其の下の裝飾には天人と銘文とが刻んであるさうだ。

塔の内部の結構などは私共に委しく分る筈がないが、いつぞや八坂（やさか）の五重の塔を解きほごして組直したことがある。此の塔も相當に古いものと認められるから、古意の存してゐることは申す

までもない。さてこの解きほごしの爲に、塔内結構の祕密が始めて知れた。塔内には全塔を貫く柱がある。これが塔全體を支へる大切な役目をつとめる外に、重大な役目がある。それは何かと云ふと、舍利の埋めてある函の蓋の重しとなつて、靈物を保護することが其の使命であるのだ。更に委しく云ふと、舍利を納めてある石器の上に石礎があつて、其の石礎に柱の突起部を承ける穴があつて、柱はこれにしつくり塡つて、塔と共に萬代不動となる所に此の柱の意義がある。専門家の測量に依ると、柱の突起部を承ける石礎の穴の直徑は三尺八寸三分、深さが八寸二分、舍利穴の底までが深さ一尺四寸と錄されてゐる。多少の異同はあるにしても、これが上代の塔の内部の結構である。然るに追々變化して江戸時代になると、柱は塔の上部から鎖を以て吊され、石礎には達しな

いで、ぶら〳〵遊んでゐるやうな構造となつた。畢竟、震災などに備へる爲に工夫したものであらう。建築上進歩した考でもあらうが、故實には甚だ遠ざかつてゐる。こんな工合に段々變遷したことを考へると、末代の塔は色々の點にどれほど墮落したか、想像に餘りある。

塔を作る嚴しい宗教上の法則があつたのが追々と亡びた。其の一つの原因は、眞言・天台などの佛教が東漸してから、舍利を多寶塔に納めて崇拜する例が開けて、塔に重きを置かなくなつたことが、塔の精神を奪ひ去つて、塔はあつてもなくつてもよい事になつた。これなどが塔の建築術を亂した大原因であらう。奈良朝時代には、塔を建てる位置は、最も大切に考へられ、或る地點で無ければ納まらなかつたものが、塔が其の精神を失つてからは、無意味の

飾物として扱はれ、空地の埋草にしたごとき趣がある。今では塔の原意を繹ぬべき上代のものがいくらも殘つてゐないから、大切に保護しなければならぬ。想ひ起せば、維新忽々の際は、古刹の塔が邪魔物にされて、賣物になつたこともある。奈良の興福寺の塔などは、二三百圓で古金屋が落札し、全部を燒却して金屬を獲んとしたこともある。幸に識者の注意でそれを喰ひ留めたのは仕合せであつたが、當時を思ふと、悚然たらざるを得ないものがある。

（市島春城―春城漫筆）

繹ぬ

悚然　ショウゼン。

市島春城　名は謙吉。新潟縣の人。萬延元年生。

ゆく秋の大和のくにの藥師寺の塔のうへなるひとひらの雲

一六　俚諺論

羅馬の一詩人が警句を蜜蜂に譬へて、「螫（はり）あり、蜜あり、軀は小さし。」と言へるは、凡ての俚諺にとは云ひ難きも、其の最も妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乘なるものは、多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味はふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては五音又は七音が其のおのづからなる律呂なれば、我が國の俚諺には、此の律に從へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずば撃たれまい。」「心の鬼が身を責める。」と云ふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ。」「思ふ念力岩でも徹す。」「身

羅馬の一詩人　マルチアリス Martialis（四〇―一〇四）

螫　音セキ。

上乘　よきこと。すぐれたること。

人口に膾炙す

律語　音律に注意をして文字を排列したる語。

律呂　リツリョ。支那に於ける音樂の調子。こゝにては單に口調の意。

尾韻　二つ以上の語句の末の語の音聲を同じやうにすること。

を捨てゝこそ浮む瀬もあれ。」などは、七七の調子をなして、語路頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。」と云ふも、其の語に律あり。右と同じ理由により、同語又は同韻を重ねたる類のものも多し。例へば「多勢に無勢。」「短氣は損氣。」「弱り目に祟り目。」「處かはれば品かはる。」「藥九層倍。」「勝つて兜の緒をしめよ。」と云ふが如し。

かく律語を成し、尾韻又は頭音を合はすこと、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具體的に云ひなして感動の強からんことを求め、又これがため屢〻誇張の言を喜ぶなども、詩歌に似たる點なり。此の故に、物の度量を云ふにも、其の數、又は量を定めて云ふを好む。「七たび搜して人を疑へ。」「人の噂も七十五日。」「あづかり物は半分の主。」などの類は數ふるに遑あらず。

定の目　ヂャウのメ。確實なりと信ずべきものの意。

文殊　モンジュ。文殊菩薩の略。最も智慧ありと稱せらる。

パラドックス　Paradox　そのものの中に矛盾を含みながら眞理ある語句。逆説。

深邃　シンスヰ。深くして遠きこと。こゝにては學問・議論などの深遠なる意。

數の中にても、最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の目。」「三年立てば三つになる。」「懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。」「三人寄れば文殊の智慧。」「朝起は三文の得。」其の他なほ多かるべし。「用心は臆病にせよ。」「黑犬にくはれて灰汁の和淬に」おそれる。」などは、誇張して云ふによりて其の意味を成せるもののの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見まことしやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。此の種の諺に、深く味はふべきもの少からず。「言はぬは言ふにまさる。」「急がばまはれ。」「逢ふは別れのはじめ。」「兄弟は他人の始り。」「論語讀みの論語知らず。」「人を使ふは使はれる。」など、其の例なるべし。斯く相反する事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一

方便

特徴なり。

パラドックスと云ふにはあらずとも、總じて反對のものを相竝ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲け。」「聞いて極樂、見て地獄。」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。」「長者の萬燈より貧者の一燈。」などは其の例なり。

反對のものを竝ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相竝べて、そを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以にして、其の比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多く此の類にあり。今思ひ出づるに隨うて、其の二三の例を掲げんか。「旅は道づれ、世はなさけ。」幾たび唱するも趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士。」これ我が國民の以て理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出でて聞け。」風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひ出でん。これを口ずさみ見よ。如何に詩心・道心・宗教心の相結びてなれる高雅幽玄なる妙趣の浮み來ることぞ。

道心　義理より發する心。

かく二つの事を竝べて相比照することなく、唯普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば「商賣は牛の涎。」「祕事は睫。」といふが如し。而して更にその比喩のみを掲げて、他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。「蟹は甲に似せて穴を掘る。」「目糞、鼻糞を笑ふ。」といふ如きはこの例なり。

暗喩

睫　マツゲ。

かく比喩の用ひやうは數種あれど、そのこれを用ふるは寓言に於ける用ひ方とは同じからず。「目糞、鼻糞を笑ふ。」といふ如きは、多

寓言

少寓言に近よれる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敍事の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ふるも、寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ばずして、たゞ常恆の事實として語るなり。

（大西　祝―大西博士全集）

敍事　客觀的敍事詩の意。英語の Epic の譯語。

大西　祝　文學博士。前京都帝國大學教授。岡山市に生る。明治三十二年歿。年三十六。

三人よれば文殊の智慧。
藪をつついて蛇を出す。
燈臺もと暗し。
いつも柳の下に鰌は居ない。
見ぬもの清し。

三人同行、必有一智。
打草驚蛇。
燈臺不自照。
守株待兎。
眼不見爲淨。

一七　色彩と自然

自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、これに對する心持の方から見ると、全色彩をまづ二つに大別することが出來る。即ち溫暖の心持を生ずる色彩と、寒冷の心持を生ずる色彩とである。寒冷色の中心は青であつて、青に近似の色は青綠から紺青に至るまで、皆涼しい感じを與へる。溫暖色の中心は橙黃であつて、これに近似の色は暗赤色から黃綠に至るまで、皆暖かな感じを與へる。

日本やイタリーあたりでは、晴天には大空は青々として眞に美しい。然るに、いづれの國民も、このやうな青々とした空を戴いてゐるといふわけにはゆかない。北歐諸國では、晴れてゐる時でも、空氣が透明でなく、空は灰色になつてゐる。勿論多少の青みはあ

青天白日の美

るが、冱えゞとした青色ではなく、鉛のやうな色をしてゐる。隨つて、晝でも天體の光が朦朧としてゐる。我々日本人はイタリーの風色をあまり美しいとは思はないけれども、北歐の人がイタリーの自然を讃美してやまないのは、彼等は青天白日の美を日常見ることが稀だからである。空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透るためである。遠山の青いのも、重疊した空氣を透して山を見るためである。

飽和

大空の色は飽和の度の強い青ではない。濃い青を日光をもつて薄くしたのだ。あの淡青、卽ち空色は靜かな色だが、喜悅の色である。

最も濃い青は、深い海の表面においてこれを見ることが出來る。それは卽ち紺青である。太平洋上、或は印度洋上の航海は、紺青の波の上を渡つて行くのであるが、極めて濃厚な紺青は、その深さ一

萬七八千呎もある大西洋の水面において、これを發見することが出來る。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不思議であるが、

ルツェルン湖
Luzern

咲いた花は忽ちに紺青に染められ、雪白と紺青との爭は限りもなく繰返されて、二つの色彩の活躍する狀は、甚だ目覺しく、航海中の一の慰めである。紺青はいかにも美しいけれど、沈鬱で、一種の凄みがある。

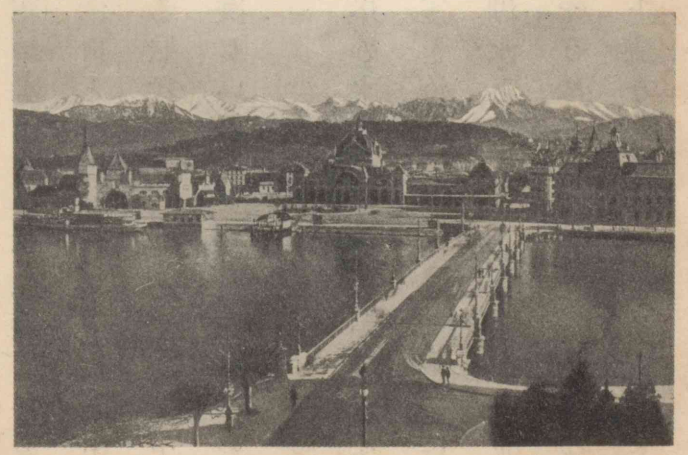
ギリシヤの內海や、イタリーの沿岸の水のやうに、海が淺くなれば、紺青はやゝ淡くなつて、瑠璃の寶玉を液化したやうに爽快になり、更にスヰスの山間ルツェルンの湖水となれば、藍青は綠を帶びて、あたかも翡翠の玉を水に化したやうになり、色は靜かであるが、沈鬱の趣は淡くなる。ライン川の上流などになると、綠色はますます勝つて、青色を壓する。尤も、河の水は鑛物性或は植物性の溶

解物があつて、種々に著色せられるけれど、概して水は深きより淺きに移るに隨ひ、紺青より青を經て、綠に移るのである。人間は眼界が狹く、一局部のものしか見えない。

局部

しかも、その局部には種々な色が現れてゐるが、地球の表面の大部分を形成してゐる水の色が青であり、そしてまた天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐるといはなければならない。空の見える處、水の動く處、人間の心を沈靜させる働が絶えず行はれてゐる。花の中にも、あやめ・紫陽花・

主調



ルツエルン湖

野生の朝顔などいづれも涼しく、靜かに人の心を休息させる色である。

寒冷色の青と正反對なのは橙黃色である。これは暖かい色であるとともに、人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する光は、最も光輝ある橙黃色である。秋の夕陽が西山に沒せんとする際の空の色は、太陽から出る黃金色の本性を最もよく發揮する。例へば、東海道で見る富士の背後に日の沒する際や、京都の愛宕山の後に日の入らうとする時の空は、全く金箔の空と化し、山嶽の碧色と相對比して、その見榮えが一層である。私の心に最も強い印象を殘したのは、紅海の上から眺めたシナイ山の夕陽の景色であつた。シナイ山が絶頂から黃金の光を浴び、山の中腹にかゝつた雲は、黃金の神火が燃えるやうに見え、莊嚴いはん方なく、炎の中に

シナイ山　Mt. Sinai アラビアのシナイ半島にあり。

エホバ　Jehovah　ユダヤ人の尊敬せし神。
イスラエル　Israel　昔のユダヤをいふ。
アポロ　Apollo　ギリシヤやローマの神話に出てくる藝術の神。

エホバの聲が聞えたとか、暗中に火の柱が立つて、イスラエルの民の沙漠旅行を先導したとかいふやうなユダヤの神話は、あゝいふ景色から涌出したのではあるまいかと想はれた。太陽の光線も、日本ではさまで强烈ではないが、ギリシヤのアテネ附近の夏の太陽といつたら、朝から强い光輝を放つて、その光が大理石質の地面に反射する時は、眼に痛みを覺える。ギリシヤ神話で、太陽の光線をアポロの射た矢であるとしたのも、なるほどと合點せられる。

太陽の光が月や星に反映する時は、よほど趣の違つた色が出る。太陽は吾人の眼に映ずる限りに於ては、熱烈な黃金色となるが、月に映じた時はやはらかく、幾分冷やかな色になる。地平を出る時の月は、空氣の汚濁してゐるため銅色を帶びてゐるが、だん〳〵高くなつて、澄み渡つた空氣を透かして月を見ると、空氣の青色が加

はつて來るために、月は黃金に銀を混じたやうに、やゝ蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體・天象の色としての黃金色は、その發顯の規模が大きく、種々人の心を躍動せしめるのであるが、小規模においては、地上の花鳥の色となり、人を樂しませる。冬の蜜柑畑、春の菜種畑は、何人が眺めても喜悅を感ずる。その他、連翹・山吹・月見草・黃菊・水仙の類、四季の花として、いづれも優しい、懷かしい趣がある。南瓜・胡瓜の花は、胡蝶の舞ふ姿と共に、野趣があつておもしろい。

風景　コロー筆

寒暄

非情の生物

東臺　東京の上野の山。

紺青と橙黃との中間に位してゐるのが、綠色及びそれに近似の色である。綠色は寒暄相和し、興奮・沈靜相合し、いはゆる折衷的な性質を有する色である。地上における非情の生物の有する特色であつて、天にはない色である。人間がいつまで眺めてゐても飽きない色は綠である。若草や若葉は大抵帶黃綠色で始まるが、日を經るに隨ひ、綠色となり終に暗綠色となる。フランスあたりでは、夏の盛りでも、木の葉は帶黃綠色で、柔かく、うひ〳〵しいが、日本や英國では、木の葉は忽ち暗綠色となり、自然の景色が硬くなる。

若葉の萌出る時は、まことに美しい。氣が伸び〳〵する。五月初の若葉の景色は、四月初の花の景色よりも、實に遙かに趣が深い。東臺の新綠、京都東山の新綠、宇治の新綠、嵐峽の新綠を訪うて樂しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が、自然の風色を樂しむ心を

松本亦太郎　文學博士。心理學者。東京帝國大學教授。群馬縣の人。

もつてゐないことを示してゐる。佛獨あたりでは、花に對してあまり騷がないが、森林の色を樂しむことは隨分盛んである。パリの公園の初夏の滴るやうな新綠が、都人士の心をひきつけることは、實に大なるものである。また英國や米國では面積の廣大な芝生をつくることが實に巧で、その國民が綠色趣味に富んでゐることをよく示してゐる。

（松本亦太郎―渡り鳥日記）

夏もやう〳〵深くなりぬれば、木として茂らざるはなく、草として榮えざるはなく、日々に物をひきのぶるやうに見えて、ひたすらに綠の色深き夏木立こそ花にもをさ〳〵劣るまじけれ。春の花は處々に咲きて稀なり。夏は山も里も、ありとしある草木毎にうちはへて皆綠の色なれば、春に異る眺なり。八千草に植ゑ集めてなづさひし前栽の草木ども、雨を帶びて各、その梢をあらはし、所得顏に心に任せて生ひ茂れるも嬉しと見ゆ。

（貝原益軒―樂訓）

旅次行軍　敵に接觸すべき虞なきとき、主として軍隊を休養せしむることに留意して行ふ行軍。
憂々　カツカツ。金石のうち合ふ音。
轣轆　レキロク。車のきしる音。
遮斷機　汽車の進行中一時踏切の通行を斷つために用ふるもの。

一八　秋の大演習

その一

松の竝木の街道を、柿の實の赤い村落を、尾花が靡く廣原を、白波寄せる渚邊を、秋晴の麗かな日を浴びて、高らかに軍歌をうたひつつ歩を運ぶ時は、旅次行軍も樂であるが、かくして六里を越し、七里八里と歩み續けると、體も次第に疲れて來る、背嚢の重みが應へる。急ぐつもりの脚が出遲れて、あたりの景色も眼には入らず、只管休憩を望むやうになる。こんな時、友軍騎兵が蹄も輕く憂々と追越して行く。砲兵が車輪に土埃を捲いて轣轆と地を震はす。自動車が疾驅し去る。遮斷機が急に行手に下りて、汽車が滑らかに辷つて行く。軍の主兵、戰鬪の勝負に最後の決を與ふる歩兵も、こゝ

破摧　ハサイ。やぶりくだく。
歩兵操典
設營隊　軍隊が一地に宿營する時、その宿營の準備に任ずる隊。

では全くみじめなものである。

「兵隊さあん。兵隊さあん。」

可愛い聲だ。顏を上げると、その汽車の窓から五六歳位の子供が、にこ〳〵と見下して居る。窓といふ窓には、乘客の笑を含んだ顏が竝んで居る。自分達の意氣地なさを見透されるやうな氣がして、俄かに胸を張る。「歩兵は剛膽にして忍耐に富み、沈著にして勇敢、克く射擊及び突擊を以て敵を破摧し、奮鬪以て最終の目的を達成し、その負擔に背かざるを要す。」歩兵操典の綱領を思ひ出して、また歩みを運ぶ。

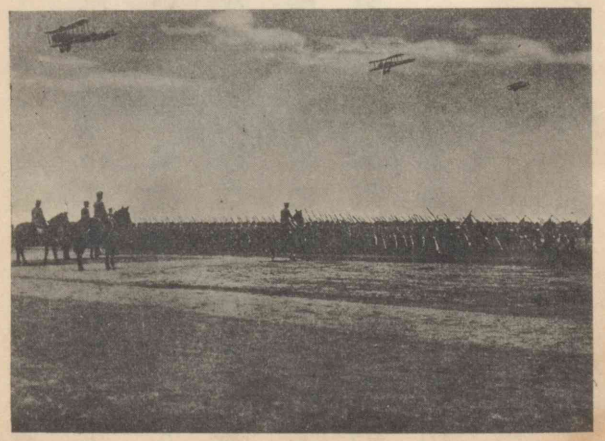
かうした行軍の後の宿營は樂みなものだ。設營隊によつて家家では、兵隊の泊る事を知つて、部屋を掃除して待つて居る。在鄕軍人や、村の有志や、青年團員・處女會員・學生・兒童等が村の入口に出

勞ふ　ネギラふ。

迎へて吳れる。宿舍長の引率でその家に著くと、家人が心から勞つて吳れる。物質的の歡待は豫め斷つてあつても、柿や蜜柑や、ふかし芋などが準備されてある。武器・被服の手入を終つて座敷へ通り、膝を崩してそれ等の御馳走をいただく。子供が慕ひ寄る。家人も仲間になる。父母の家に歸つたやうに嬉しくなつて他愛なくはしやぐ。そしてその夜、疊の上に蒲團を著て樂しい夢を結ぶ。

「おい、疊が嬉しいなあ。」

眠つたと思つた戰友が不意に話しかける。



觀兵式

夢遊病者

だが、必ずしも民家に泊り得るとのみは限らぬ。時には晝の行軍を續けて、夜も眠らずに歩かねばならぬことがある。所謂夜行軍を行ふ場合である。航空機の發達した今日では、敵の目視を避けるため、夜暗に乘じ行動するを有利とするため、夜行軍を行ふ場合も多くなつた。默々として闇の道を歩んで居るうちに、そろそろ眠くなつて來る。懸命に我を勵ましても、いつか眠りに墮ちてしまふ。夢遊病者のやうにふら〳〵と足を運んで居る。その足が動かなくなつて列の中で立往生をする。背後の戰友がどんと突當る。是も夢遊病者で眼をつぶつて居たのだ。はつと思つて歩み出すと、此度は前の戰友にぶつつかる。倒れかゝる體を支へて脚が思はぬ方向へ、そしてどんと電柱へぶつつける。運が惡いと、その儘道を踏み出して溝や水田へ轉げ込む。馬の首が不意に

背後から肩越しに現れる。振り返ると、傳騎が是も馬上で居眠つて居る。左に右に、體が鞍から搖れ出して、今にも落ちさうだ。馬さへも眼をつぶつてふら〳〵と歩いて居る。自分のことを忘れて思はずふき出してしまふ。それで眼が醒める。かうした時には銃聲が有難い。何處かで一發闇をつんざくと、血の循環が急に活潑になり、足の運びも確かとなつて、電柱に衝き當る心配も、水田へ陷る氣遣もなくなる。そして夜行軍の苦みから救はれる。

駐軍　軍隊が一處にとどまること。

その二

駐軍間の警戒は通常前哨を以てする。その前哨の最前に立つのが歩哨である。歩哨は軍の耳目である。

「此の歩哨は前哨第一中隊、第一小哨の第二複哨である。敵の前哨線は、此の前方約二里、吉野村より櫻井村に亙る附近にある――。」と小哨長が特別守則を授けて去り、歩哨掛が他の交代兵を連れて小哨へ歸つた後は、戰友と唯二人、こゝの守地に留まつて警戒に當るのだ。

今授かつた特別守則を頭の中で繰返してみる。此の歩哨の番號、敵情、前方に在る我が部隊及び斥候の情況、必要なる道路、村落の名稱、特に監視すべき要地、隣歩哨の位置、番號、及び之との連絡法、小哨竝びに中隊の位置、及び是等各位置に通ずる經路、敵襲に際し取るべき處置、其の他特に注意すべき事項等をしつかりと覺え込む。

あの森は八幡宮、あの村は國魂村、此の道は――と、敵方を油斷なく監視して居るうちに、日が傾く、夕靄が涌く、村々の空に煙が棚引く。ぼつ〳〵と灯影が見えると急に四邊が靜かになり、視界は闇

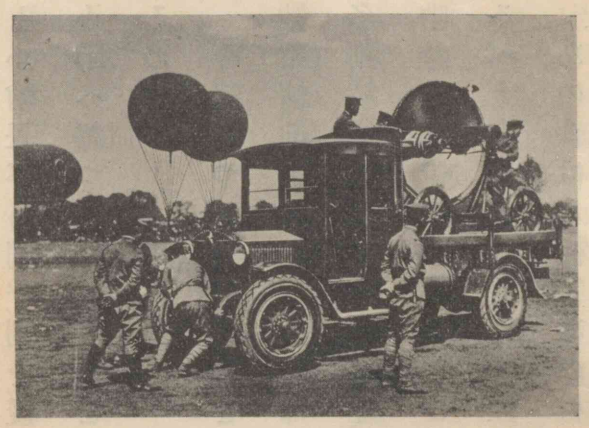
視界

徵候

あやめもわかぬ

に狹められて來る。

「歩哨は絶えず敵方を監察し、總て疑はしき徵候に深く注意し、若し敵に關し發見せしことあらば、其の一人は小哨長に報告すべし。」かうした一般守則を思ひ浮べて居ると、身は全くあやめもわかぬ闇の中に唯一人立つて居るのに氣付く。



氣球

犬の鳴聲がする。銃聲がする。胸の鼓動が高まつて思はず銃を握りしめる。

「おい！」

戰友が呼ぶ。低い聲だ。

胸牆
キョウシャウ。胸ほどの高さの城壁。

口糧

「何か足音を聞かぬか。」

地に耳をあてゝ聽き取るらしい動きが闇の中に見える。神經が鋭敏になり、木の根や叢も敵の斥候かと思はれ、寒氣が一入身に沁むを覺える。

かくして次第に敵に近づき、愈〻此の敵と相對して夜を過すことになると、全隊殆ど戰鬪隊形に展開したまゝ天明を待つのだ。

第一線の歩兵は、多くその位置に塹壕を掘り、胸牆には夜間の射擊の設備を整へ、各兵は銃を手にして壕内で夜を徹する。炭火も焚かず、天幕も張らず、暗闇の中に聲をひそめてこもつてゐる。土の濕が足から體に沁み、風の冷えが服を徹す。携帶口糧の麵麭を嚙む音が靜かな壕内に聞える。空には星が爛々と冴えて居る。草木も眠るといふ夜半だ。

意表に出づ
創意
機動
疾風迅雷（シツプウジンライ。）
鞭聲肅々夜渡レ河ヲ
賴山陽の詩の一節。

「敵の意表に出づるは機を制し勝を得るの要道なり。故に旺盛なる企圖心と、追隨を許さざる創意と、神速なる機動とを以て、敵に臨み、常に主動の位置に立ちて全軍相戒めて嚴に我が軍の企圖を祕匿し、疾風迅雷、敵をして之に對應するの策無からしむること緊要なり。」とは我が戰鬪綱要の教ふる所である。我は動かずとも敵は動く。各種の捜索偵察機關が終夜その活動を續ける。斯くして居ても、命令一下此の塹壕を捨てゝ闇の中を思ひもかけぬ方面へ移動することがある。傳令が本部へ來た。將校が立上る。

「出發準備。」

低いが力強い聲だ。攻擊命令が出たのだ。默々と集合し、默々と前進を起す。隱密に、迅速に、確實に、秩序と連繫とを保つて、隊は暗黑の中を所命の位置に向つて行動する。「鞭聲肅々夜渡河」といふ場合である。敵に覺られてこの展開を妨害されたら、攻擊部署を整へられなくなる。されば と言つて、徒に時間を費して居ては、夜があけて仕舞ふ。

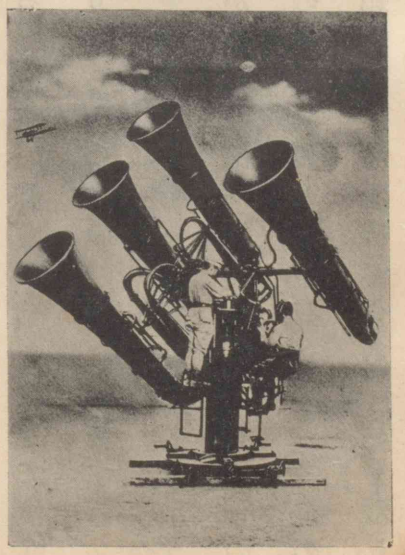
武者振ひ
林緣

銃聲が不意に遠くに聞える。道路の眞中に藁を被つて伏臥して居た我が監視兵がむつくり立ち上つて、中隊長に報告する。中隊長が小隊長に命令を下す。そして小隊は、中隊主力に別れて、傍の森の中に潛行する。此處が步兵の第一線なのだ。實に霜の響も徹る靜けさだ。武者振ひのする緊張した空氣だ。分隊長の命令で林緣に出て伏臥する。霜柱の碎ける音がする。息を殺して隣兵を見る。同じく伏臥して居る。眼を上げて暗をすかすと我が斥候が地を這ふやうに藪蔭から向うに消える。鷄の聲が幽かに聞えて曙光が野に動くらしい。視界が徐々に廣くなり明るく

なつて來る。左右の戰友が明かに見える。霧の中から敵の陣地の山が、丘が、森が次第に濃く見えて來る。夜が明けたのだ。

物珍らしく前方の敵陣地を窺つて居ると、突如轟然たる砲聲が起る。空氣が振撼して天が轟き地が響く。我が砲兵が射擊を開始したのだ。續いて二發、三發、敵の砲兵も亦之に應射する。プロペラの音が次第に高く次第に強く蒼空を攪亂する。爆音が更に加はる。高射砲が射つたのだ。翼を連ねた飛行機が、今は既に晴れ渡つた碧空に、明かにその姿を見せて來る。敵の飛行機だ。野砲の音、重砲の音、高射砲の音、飛

轟然　グワウゼン。
振撼
攪亂　カウラン。カクラン。かきみだす。
高射砲　飛行機を射擊する大砲。



聽音機

行機の音、音の世界だ。響の世界だ。

「攻擊前進！」

鋭い號令だ。

森蔭から、草原から、村落・堤防・田の畝・畑の畔から、左右に、散兵線が前進するのが見える。一進一止、海波の如く、敵陣に向つて押寄せて行く。

銃聲が起る。豆を煎るやうだ。輕機關銃、重機關銃が震蘯的な音を續ける。焔を噴く。歩兵砲が此の間に思ひ出したやうに鳴る。攻擊の波が愈〻高まり益〻騰る。將校の刀が閃く、兵の銃劍が輝く。豫備隊が續く、總豫備隊が續く。突擊の機が迫つて來たのだ。

秋の尾花の如き銃劍の波間に、軍旗が翩翻と旭日に輝く。

喊聲が起る、續いて起る。此處に彼處に、突擊又突擊。喊聲又喊

震蘯
翩翻　ヘンポン。ヘンパン。ひるがへるさま。

聲。部隊の波が打寄せて碎ける。渦卷が捲きつゝ狂ふ。劍光が泡と散り、飛沫と迸る。正に混戰亂鬪だ。

喇叭が聞える。嚠喨、秋晴の山野に響く。氣球が蒼空にふうはりと浮ぶ。演習中止が命ぜられたのだ。喊聲が消える。銃砲聲が消える。そこに部隊も斥候も、傳令も銃を立てゝ停止して居る。山も澄み、野も丘も空氣も澄んで、麗かな太陽の光に輝いて居る。聲なく動くものなき大自然の靜けさだ。夢のやうな現實だ。この嚴肅な戰場を、統監大元帥陛下は、燦然と輝く天皇旗を前に、肅々と白馬を進めさせ給ふのである。

（齋藤瀏）

霰ふり鹿島の神を祈りつゝすめら御軍に吾は來にしを

（大舍人部千文）

嚠喨　リユウリヨウ。音聲がさえわたりて、よく聞ゆること。

氣球　こゝでは信號に揭ぐるもの。

齋藤瀏　陸軍少將。長野縣の人。

爲朝　源爲義の第八子。嘉應二年大島に於て自殺。年三十二。（一七九九―一八三〇）

新院　崇德上皇。齋院の御所　賀茂社に奉仕する齋院の御所。白河殿にありき。

左府　左大臣藤原頼長。保元元年敗死。年三十七。（一七八〇―一八一六）

大炊御門表　宮城の都芳門より東に走れる大通り。

馬ノ助　馬寮の次官。

爲義　義朝の父。保元

一九　鎭西八郎爲朝

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人、竝びに多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。其の勢百騎許りには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は內裏へ參りけり。爰に鎭西八郎爲朝は、「我は親にも連れまじ、兄にも具すまじ。高名不覺も紛れぬやうに、たゞ一人如何にも强からむ方に差向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はむずるなり。」とぞ申しける。依

元年歿。年六十二。(一七五五—一八一六)
義朝　平治元年平治の亂に敗死。年三十八。(一七八二—一八一九)
不覺　失敗。
器量　物事の役に立つ才能。
弓手　左の手。
不孝して　勘當して。
めのと　こゝにては養育する人。
總追捕使　追捕使を總括する役。追捕使は諸國にあつて非を正し罪人を捕ふる役。

つて西河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば、左衞門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞えし。

抑〻爲朝一人として、殊更大事の門を固めたる事、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に越え、心飽くまで剛にして、大力の强弓、矢次早の手きゝなり。弓手の肘、馬手に四寸伸びて、矢束を引く事世に越えたり。幼少より不敵にして、兄にも處をおかず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば惡しかりなむとて、父不孝して、十三の歳より鎭西の方へ追ひ下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後國阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が壻になつて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へむとしければ、菊池・原田を始めとして、所々に城を構へて立籠れ

香椎宮　福岡縣糟屋郡香椎村。仲哀天皇・神功皇后を祀る。官幣大社。
上卿
宣旨
外記　詔勅及び上奏文を起草する役。
解官
前檢非違使　非法非道を取締りし役。それを辭せし後の人を前檢非違使といふ。

ば、「その儀ならば、いで落いて見せむ。」とて、いまだ勢もつかざるに、忠國ばかりを案內者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇處なり。城を攻むる謀、敵を打つ術、人に勝れて、三年が內に九國を皆攻め落して、自ら總追捕使に押成つて、惡行多かりけるにや、香椎宮の神人等、都に上り訴へ申す間、往にし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言。梟惡頻聞、狼藉尤甚。早可令禁進其身。依宣旨執達如件。

然れども、爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使になされけり。爲朝之を聞きて、「親の科に當り給ふらむこそあさましけれ。其の儀ならば、我こそ如何

なる罪科にも行はれむずれ。」とて、急ぎ上りければ、國人どもも上洛すべき由申しけれども、「大勢にて罷り上らむ事、上聞穏便ならず。」とて、形の如くに附き從ふ兵ばかり召具しけり。乳母子の箭前拂の須藤九郎家季・其の兄透間數への惡七別當・手取の與次・同じき與三郎・三町礫の紀平次大夫・大矢の新三郎・越矢の源太・松浦の二郎・左中次・吉田の兵衞・打手の紀八、高間の三郎・同じき四郎を始めとして、二十八騎をぞ具したりける。依つて去年より在京したりしを、父不孝を赦して、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つきれたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫うたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じく獅子の金物打つたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七

乳母子

獅子の丸　圓く描かれたる獅子の模樣。

尺五寸にて鈌打つたるに、三十六差したる黑羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えて由々しかりき。謀は張良にも劣らず。されば堅陣を破る事、吳子・孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝見むとてこぞり給ふ。

左府卽ち合戰の趣計らひ申せと宣ひければ、畏まつて、「爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者共從へ候ふについて、大小の合戰數を知らず。中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて强陣を破り、或は城を攻めて敵を亡すにも、皆利を得る事、夜討に如くこと侍らず。然れば只今、高松殿に押寄せ、三方に火を懸け、一方にて支へ候はむに、火を遁れむ者は矢を免るべからず、矢を恐れ

鈌

樊噲　漢の高祖に仕へし勇士。

由々し　重大なるさま。

張良　漢の高祖に仕へし智謀の臣。

吳子・孫子　何れも周時代の兵法家。

養由　楚の恭王に仕へし弓の達人。

上皇　崇德上皇。

鎭西　九州地方の總稱。

高松殿　假內裏。後白河天皇の御所。

主上　後白河天皇。
心にくゝも候はず

駕輿丁　御輿をかつぐ人。

掌を返す如し　事の非常に容易なるをいふ。

荒儀　荒々しきこと。

無下に　非常に。全く。

南都　奈良。

む者は火を遁るべからず。主上の御方心にくゝも候はず。但し兄にて候ふ義朝などこそ懸け出でむずらめ、それも眞中指して射通し候ひなむ。まして清盛などがへろ〳〵矢、何程の事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散して捨てなむ。行幸他所へならば、御免を蒙つて、御供の者少々射むずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てゝ逃去り候はむずらむ。その時爲朝まゐり向ひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に卽け參らせむ事、掌を返す如くに候ふべし。主上を迎へ參らせむ事、爲朝矢二つ三つ放さむずるばかりにて、いまだ天の明けざらむ前に勝負を決せむ條、何の疑か候ふべき。」と、憚る所もなく申したりければ、左府「爲朝が申す樣、以ての外の荒儀なり。年の若きがいたすところか。夜討などといふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎のわたくし事なり。さすが今こゝに、源平數

衆徒　澤山の佛徒。

興福寺　奈良七大寺の一。藤原氏の氏寺。

富家殿　藤原頼長の父。關白忠實。

院司　上皇御所の官人。

先蹤　先例。

を盡して、兩方にあつて勝負を決せむに、無下に然るべからず。其の上、南都の衆徒を召さるゝ事あり。興福寺の信實・玄實等、吉野十津河の指矢三町・遠矢八町といふ者共を召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に著き、富家殿の見參に入り、曉こゝへ參るべし。彼等を待ち調へて、合戰をば致すべし。又明日院司の公卿殿上人を催さむに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬる事兩三人に及ばゝ、殘りはなどか參らざるべき。」と仰せられければ、爲朝上に承伏申して、御前を罷り立つてつぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計如何あらむ。義朝は武略の奧義を極めたる者なれば、定めて今夜寄せむとぞ仕り候ふらむ。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良の大衆も入るべけれ。只今押寄せ

て風上に火を懸けたらむには、戰ふともいかでか利あらむや。敵勝つに乘る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しき事かな。」とぞ申しける。

（保元物語）

保元物語
三卷。後白河天皇の御即位に筆を記し保元の亂の顚末を記す。
作者未詳。

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢を賴みて、はじめの矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。僅に二つの矢、師の前にて一つを疎かにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずと雖も、師これを知る。このいましめ、萬事に亙るべし。道を學ぶ人、夕べには朝あらむことを思ひ、朝には夕べあらむことを思ひて、重ねてねむごろに修せむことを期す。況んや一刹那のうちに於て、懈怠の心あることを知らむや。何ぞ只今の一念に於てただちにすることの甚だ難き。

（吉田兼好―徒然草）

待賢門
大内裏の東面の中程にあり。
六波羅
平家の邸あり。當時二條天皇の御在所。
籠手
折烏帽子
冑の下に著る烏帽子。
大床
武家の邸宅の外側の間。公家でいふ廣廂のこと。
頭中將實國
源頼國の三男。藏人頭にて近衛の中將を兼ねたるもの。
王事鹽き事なし
詩經唐風鴇羽篇に、「王事靡ク盬キ、

二〇　待賢門の戰

その一

さる程に、六波羅の皇居には、公卿僉議あつて清盛を召されけり。紺の直垂に、黑絲縅の腹卷に、左右の籠手をさして、折烏帽子引立てて、大床に畏まる。頭中將實國を以て仰せ下されけるは、「王事鹽き事となければ、逆臣滅びむこと疑なし。但し、たま〳〵新造の內裏なり。もし回祿あらば、朝家の御大事たるべし。官軍僞りて引退かば、兇徒定めて進み出でむか。然らば官軍を入れ替へて、內裏を守護せさせ、火災なきやう思慮あるべし。」と仰せ下されければ、清盛畏まつて、「朝敵たる上は、逆徒の誅戮は掌の中に候間、時刻を廻すべからず。然らば、定めて狼藉出來せむか。火失なからむ條こそ難

不レ能レ執ニ黍稷一。こゝにては朝廷の事は堅固にして破れずとの意。
范蠡　越王勾踐の臣。
項羽　楚の王。
涯分　身分に應ずるかぎり。
金闕　金馬門とて、漢の未央宮にありしもの。轉じて皇城の意。
賴盛　清盛の弟。
教盛　清盛の弟。賴盛の兄。
櫨の匂の鎧　黄色のぼかしとなれる絨の鎧。匂は末濃の逆にて、下を濃く上を薄くぼかしたり。
黄桃花毛　葦毛のやゝ黄色を帶びたるもの。
華洛　京都。
梅壺　凝花舍。禁中五舍の一。
桐壺　淑景舍。禁中五舍の一。
登花殿　禁中十七殿の一。
南階　紫宸殿の南の正面の階段。

儀の勅諚にて候へ。さりながら、范蠡が吳國を覆し、張良が項羽を滅せしも、皆これ智謀の致す所なれば、涯分武略を廻らして、金闕無異なるやうに成敗仕るべし。」と奏して出でられけり。

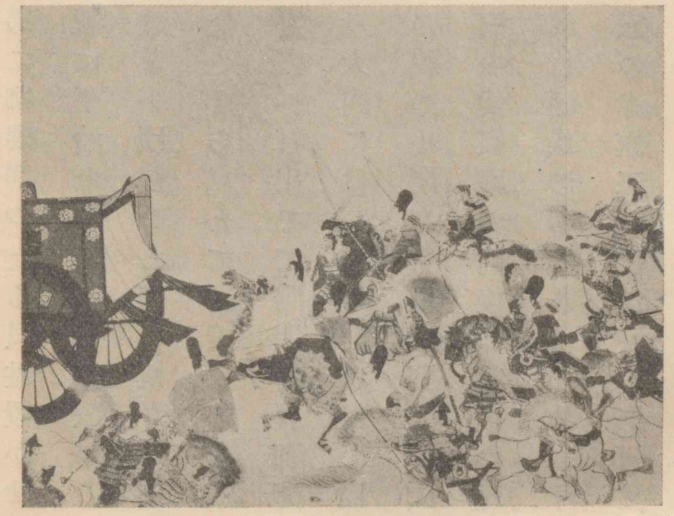
主上御座あれば、皇居の御固に清盛をば留めらる。大内へ向かふ人々には、大將軍は、左衞門佐重盛・三河守賴盛・淡路守教盛、侍には筑後守家貞・子息左衞門尉貞能・主馬判官盛國・子息右衞門尉盛俊・與三左衞門尉景安・新藤左衞門家泰・難波次郎經房・瀨尾太郎兼康・伊藤武者景綱・館太郎貞康・同じき十郎貞景を始めとして、都合その勢三千餘騎、六波羅を打出でて、賀茂川を馳渡し、西の河原に控へたり。左衞門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に櫨の匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の冑の緒を締めて、小烏といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持つて、黄桃花毛なる

馬に柳櫻摺つたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、「年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げむこと、何の疑かあるべき。誰かこゝに、樊噲張良が勇をなさざらむ。」とて、三千餘騎を三手に分けて、近衞・中御門・大炊御門、大宮表へ打出でて、陽明・待賢・郁芳門へ押寄せたり。

大内には、三方の門を鎖し固め、東面をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をも俱に開きて、大庭には馬共多く引立てたり。梅壺・桐壺・紫宸殿の前後・登花殿の脇の壺まで、兵ひしと竝み居たり。これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流うち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流さしあげて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大内も響き渡つて夥し。鬨の聲に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信賴卿、顏色變りて草葉の如くにて、南階

穆王
周の王。八匹の駿馬を得て、天下を巡りきといふ列子中の傳說による。

をおりられけるが、膝顫ひて下りかねたり。人竝々に馬に乘らむと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の、大鎧は著たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心にも似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でむ、つと出でむとしけるを、舍人七八人寄つて、馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乘りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、「疾く召し候へ。」とて押揚げたり。餘りにや押したりけ



六波羅行幸

日華門
紫宸殿の大庭の東の中門。西門の月華門と相對す。

（平治繪卷）

乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも見えざりけり。

む、弓手のかたへ乘越して、伏樣にどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顏に砂礫と附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日頃は大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「あの信賴といふ不覺人は、臆したりな。」とて、日華門を打出でて、郁芳門へ向かはれければ、信賴も鼻血押拭ひ、とかうして馬に搔

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か。かく申すは、桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三。」と名告り懸けければ、信頼返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。われ先にと逃げければ、重盛彌〻勇みて、大庭の椋の木のもとまで攻めつけたり。義朝これを見て、「惡源太はなきか。信頼といふ大臆病人が待賢門を早破られつるぞや。あの敵追出せ。」と宣ひければ、「承り候。」とて驅けられけり。續く兵には、鎌田兵衛・後藤兵衛・佐々木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫、以上十七騎、轡を竝べて馳向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名告れ、聞かむ。かく申すは、清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大倉の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を討ちしよりこのかた、度々の合戰に一度も不覺の名を取らず。年積つて十九歳。見參せむ。」とて、五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、竪樣・横樣・十文字に、敵をさつと蹴散らして、「端武者どもに目な掛けそ。大將軍を組んで討て。櫨の匂の鎧に、蝶の裾金物打つて、黃桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押竝べて組んで落ち、手捕にせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと、防ぐ平家の侍ども、與三左衛門・新藤左衛門を始めとして、百騎ばかりが中にぞ隔てたりける。惡源太を始めとして十七騎の兵ども大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立てゝ、左近の櫻右近の

惡源太　源義平。義朝の長子。

大倉　埼玉縣比企郡にある地名。

帶刀先生　兵仗を帶びて東宮に侍する武官を帶刀といひ、その長官を先生といふ。

義賢　義朝の弟。

橘を七八度まで、追廻して、組まむ〳〵とぞ揉うだりける。十七騎に驅立てられて、五百餘騎、叶はじとや思ひけむ、大宮表へさつと引く。

左衛門佐 平重盛。
平將軍 平貞盛。
向樣 面と向つて。

その二

大將左衛門佐は、弓杖突いて、馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參つて、「曩祖平將軍の、再び生れ替りたまへる君かな。」と向樣に譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せむとや思はれけむ、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、また大庭の椋の木まで攻寄せたり。惡源太驅向ひ、見廻していひけるは、「只今向ひたるは、皆新手の兵なり。但し大將は、元の大將重盛ぞ。以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ。押しならべて組んで捕れ、兵ども。」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難

波次郎・同じき三郎・瀨尾太郎・伊藤武者を始めとして、百餘騎が中に隔てたるに、ことともせず、惡源太、弓をば小脇に搔い挾み、鐙踏ん張り突立ち上り、左右の手を揚げ、「幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はむ。寄れや、組まむ。」といふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下を追廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛、組みぬべうもなくや思はれけむ、また大宮表へ引いて出づ。

惡源太、二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度度驅入るらめ。あれ速かに追ひ出だせ。」といひ遣されければ、俊綱馳せて、このよしをいふに、「承り候。進めや、兵ども。」とて、色も變らぬ十七騎、大宮表に驅出でて、敵五百餘騎が中へ、面も振らず割つて入

色も變らぬ

かたなづけ　まだ十分に馴らされざる荒馬のこと。
射向の袖　左の鎧袖。
箙かづき　矢竹の鏃に接するところ。

る。引立つたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、「我が子ながらも義平は、よく驅けたるかな。あ、驅けたり。」とぞ譽められける。

大將重盛・與三左衞門景安・新藤左衞門家泰、主從三騎驅離れ、二條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田にきつと目合せて、「こゝに落つるは大將とこそ見れ。返せや。」とて追懸けたり。既に堀河にて追詰めけるが、弓手の方に材木多く滿ち〳〵たるに、惡源太の乘り給へる馬、かたなづけの駒にて、材木にや驚きけむ、馬手の方へ蹴飛んで、小膝を折りどうと伏す。鎌田兵衞延ばさじと、十三束取つて番ひ、よつぴいてひようと射る。重盛の射向の袖に、はたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちやうと中つて、箙かづき碎けて跳ね返れり。惡源太、「これは聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て落ちむ所を討て。」と下知せられければ、又よつぴいて追ひ樣に、箙の隱るゝ程射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳ね落され、冑も落ちて大童になり給ふ。鎌田、堀河を馳越えて、重盛に組まむと落合ふ。重盛近づけては叶はじとや思はれけむ、弓の弭にて、鎌田が冑の鉢をちやうと突く。突かれてゆらゆる間に、冑を取つて打著つゝ、緒を強くこそ締められけれ。與三左衞門馳寄つて、中に隔り申しけるは、「漢の紀信は、高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。『主辱しめらるゝ時は臣死す。』といふにあらずや。景安、こゝに在り。寄れや、組まむ。」といふまゝに、鎌田兵衞と引組んで、取つて押へける所に、惡源太馬引起し、これも堀河を馳越えて、重盛に組まんと飛んで懸りけるが、鎌田をや助くる、大將をや討たむと思案しけれども、大將には又も寄

唐皮　貞盛より傳はれる平家重代の鎧。
大童　結びが解けて、童の髪の如く垂れ亂れたる髪。
滎陽　河南省にある地名。
主辱しめらるゝときは云々　君と臣とは艱難死生を共にするといふ意。國語に、「范蠡曰、爲ニ人臣一者、君憂レバ臣勞、君辱メラルレバ臣死ス。」韓非子に、「主辱メラルレバ臣苦シミ、上下相與同ニスルコトレ憂ヲ久矣。」

せ合ふべし、正家を討たせては叶はじと思ひ、與三左衞門に落合うて、三刀刺して首を取る。　重盛は頼み切つたる景安討たせて、命生きて何かせむとて、既に惡源太と組まむと寄せられけるを、新藤左衞門馳來り、「家泰が候はざらむ處にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。」とて、我が馬を引向け、中に隔てゝ、惡源太とむずと組む。正家は重盛に組まむとしけるが、主を討たせては叶はじと思ひければ、新藤左衞門に落重なつて首を掻く。この間に重盛は虎口を遁れて、六波羅までぞ落ちられける。

（平治物語）

猪も共に吹かるゝ野分かな　芭蕉

平治物語　三卷。平治の亂の顚末を記す。作者未詳。

二　柱くぐり

大佛殿方廣寺、本尊は毘盧遮那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向きにして東西二十七間、南北は四十五間あり。　彌次郎兵衞・北八、こに法施し奉りて、彌「なんと話に聞いたよりか、がうせいなもんぢやねえか。　あの、かうしてござるお手のひらへ、疊が八疊しけるさうだ。　あのお鼻の穴からは人が傘をさして出られると。　お後へ廻つて見よう。　おや、お背中に窓があいてゐらあ。」　北「あれは大方汐を吹くところだらう。」　彌「鯨ぢやあるめえし。」　北「おや〳〵、あれみんなが柱の穴をくぐつてゐるは。」　彌「ほんに、こいつは奇妙々々。」と、この御堂の柱の許にはちやうど人のくぐるだけ切抜きし穴あり。　田舍道者ども戯れにくぐりぬける。　北八も同じくくぐり、

方廣寺　京都市下京區茶屋町にあり。木像の大佛あるを以て世に大佛殿とも稱す。

毘盧遮那佛　大日如來。

法施

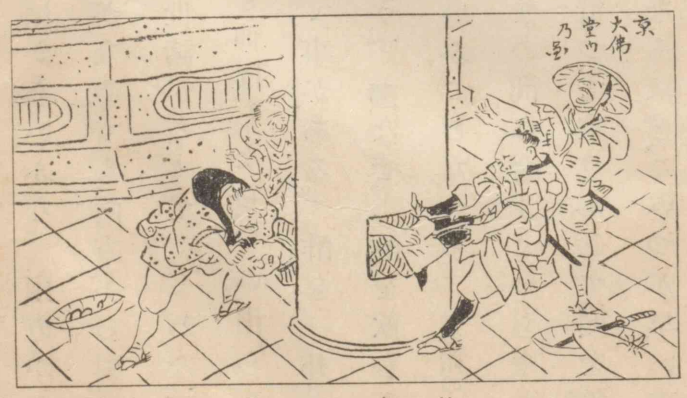
田舍道者

ひよんな事
飛んだ事。

北「こりや面白い。おいらはくゞれるが、彌次さんは肥つてゐるからぬけられめえ。」彌「おれだとつてなにこれが。」と四這になつて柱の穴へ體半分程入れかけたが、一向にぬけられず、あとへ戻らうとするに、脇差の鍔が横腹につかへて痛み、こらへ切れず。彌次郎顔を眞赤になし、「あいたゝゝゝ。こりやひよんな事をした。」北「おや、どうした。ぬけられねえか。」彌「これ、手を引つぱつてくりや。」北「はゝゝゝ、こいつはをかしい。」と、彌次郎の兩手をぐつと引つぱる。彌「あいたゝゝゝ。」北「弱い男だ。ちつと辛抱すればいゝ。」彌「あとの方から足を引いてくれろ。」北「承知々々。」と、うしろへ廻り兩の足を捕へ「やあえんさあ〳〵。」彌「あいた〳〵。」北「ちつと堪へなせえ。よつぽど出かけたやうだ。やあ、えんさあ〳〵。」彌「あゝ待つてくれ待つてくれ。腰骨が折れるやうだ。こりや、やつぱり前の方から

算段
計畫。

ら引き出してくれ。」といふ故、北八又前へ廻り、兩手を捕へて引く。北「やあえんさあ〳〵。」それ又こつちへ彌「こりやたまらぬ。よつぽど出て來た。」彌「こりやたまらぬ。あいたゝゝゝ。北八これではいかぬ。初手のやうに又あとへ引戻してくれ。」北「えゝ、いろ〳〵なことをいふ。」と、又後から足を捕へ「やあえんさあ〳〵。」彌「待て待て待て。こりやどうでも前の方から引いてもらはう。」北「えゝ、そんなに前へ廻つたり後へ廻つたり、引出しては引戻し、いつまでも果てしがねえ。こりやいい算段がある。」そばに見てゐたりし參詣の人を頼みて、北「もし、ど



柱くぐり

あのさん　あの人。あの方。

かうさんせ　かうなさい。

うぞこつちからおめえ引つぱつて下さいませ。わしがあつちへ廻つて、足を引きずり出しますから。」彌「ばかあいふな。兩方から引つぱつては出る瀨がねえ。」北「出る瀨がなくても、兩方から引つぱると、前へ廻つたり、後へ廻つたりする世話がなくていゝわな。」

參詣の人「いや、兩方からあのさんの體を引き伸ばしたら、つい出られさうなもんぢやあろぞい。」北「こりやいゝ事がある。酢を一升も買つて來て、彌次さん、おめえに飲ませよう。」彌「なぜ。酢を飲むとどうする。」北「はて酢を飲むと痩せるといふことだから。」參詣の人「はゝゝゝ、そないな事いうたてて、いんまの間に合ふこつちやないさかい、かうさんせ。どこぞへいて槌借つて來さんして、頭を後の方へ打込まんしたがよいわいの。」北「なるほど、こいつが早い理窟だ。しかしそれでは命があるめえ。」參詣の人「されば、そこはどう

土砂とて來て云云　弘法大師の加持の土砂を死體にふりかくれば硬直を和ぐと傳ふ。

一番の桶　一番大きな棺桶。

ちとべし　少しばかり。

こだはつて　つかへて。

むだ　むだ言。

いけまんせ　氣張つて元氣を出しなさい。

も請合はれんわいの。こりやり、わしが智慧貸そわいの。何ぢやろと、あのさんのからだを和かにして、引出すがよかろさかい、かうさんせ。土砂とて來てかけさんせいの。」田舍者「すんだら土砂のうぶつかけずと、一番の桶さあ買つてきなさろ。手足をちとべし、をん曲げたら入るべいのし。」彌「えゝ、いめえましい事をいふ。むだどころぢやあねえ。北八、早くどうぞしてくれぬか。」北「待ちなよ。ははあおめえ脇差の鍔が横腹へこだはつて、いてえのだ。」と、手を差入れてひねくり廻し、やう〳〵脇差をぬいて取る。彌「いかさま、これでどうか寛ぎがあるやうだ。」北「どれ〳〵、いや、時にどなたぞ前の方から押し出して下さいませ。わしが足を持つてこつちへ引き出しますから。やあえんさあ〳〵。」參詣の人「それ出るわいの。まちつとぢや、いけまんせ。」彌「あゝうゝゝゝ。いてえ〳〵。」北「し

めたぞ。えんやあ〳〵。そりや出たぞ〳〵。」と、やう〳〵の事にて引出せば、彌次郎は大汗をふき〳〵、ほつと溜息つきながら、「やれ〳〵ありがてえ。こりやどなたも御苦勞でございやした。これ、著物が擦り切れて、あばら骨が今にぴり〳〵する。」

傘さして出るお鼻よりはしらなるあなおそろしや身をすぼめても

かく詠み興じて大笑となり、それより御境内をめぐり、蓮華王院の三十三間堂にて、

いやたかき五重の塔にくらべ見ん三十三間堂のながさを

（十返舍一九―東海道中膝栗毛）

此の世をばどりやおいとまにせん香の煙とともに灰さやうなら（一九）

蓮華王院　大佛殿の南。蓮華王院は寺の名。本堂は有名なる三十三間堂。

五重の塔　京都市下京區九條町にある塔。

十返舍一九　本名重田貞一。戯作者。江戸に住す。天保二年歿。年六十七。（一四二五―二四九一）

二三　開拓者の苦心

玄白は腑分と聽くと、自分の心が飛揚するのを抑へることが出來なかつた。彼はターヘル-アナトミアを手にして以來、腑分の日を一日千秋の思で待つてゐた。彼はそれを實地に照らして、一日も早く確めたかつたのである。

三月四日小塚原の刑場で罪人の腑分を始めて見た玄白は、ターヘル-アナトミアの繪圖と、寸分の違ひもないことを認めた。居合せた良澤と玄適と淳庵とは、同じ感激に浸つてゐた。それは、不思議な阿蘭陀の醫術に對する讃嘆の心であつた。

刑場からの歸途、玄白は、どうしても此のターヘル-アナトミアの一卷を、飜譯したいと語つた。他の三人は直ちに同意した。早速

玄白　杉田玄白。江戸末期の醫家。江戸の人。文化十四年歿。年八十五。（一三九三―二四七七）

腑分　フワケ。身體の解剖。

ターヘル-アナトミア　Tafel Anatomia

良澤　前野良澤。玄白・玄適・淳庵等と同時代の醫家。豐前中津の人。享和三年歿。年八十一。（一三八三―二四六三）

玄適　小杉玄適。

淳庵　中川淳庵。

翌日から良澤の家で、其の研究を始めることを約束して、それ〴〵別れたのであつた。

約の如く、その翌日を始めとして、四人は平河町なる良澤の家に、月五六回づつ相會した。

杉田玄白

良澤を除いた三人は、和蘭文字二十五さへ、最初は定かに覺えては居なかつた。

良澤は、三人の人々に蘭語の手ほどきをした。彼はさすがに長崎へ留學したことがあるだけに、多少の蘭語を知り、章句語脈の事も、少しは心得て居たけれども、それも殆んど言ふに足りなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に教へることは、まう何も殘つて居な

章句語脈

かつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は始めてターヘル-アナトミアの書に向つた。

前野良澤

が、開卷第一の頁から、艪櫂の無い船が大洋に乘り出した如く、ただ茫洋として何處からも手の附けようがなく、あきれにあきれて居る外はなかつた。

茫洋　バウヤウ。

が、二三枚めくつた處に、仰向けにした人體全象の圖があつた。彼等は考へた。そして人體內部の事は、知り難いが、表部外象の事は、其の名處も一々知つてゐることであるから、圖に於ける符號と說明の中の符號とを合はせ考へるのが一番取付き易いことだと

思つた。

彼等は眉・口・唇・腹・股・踵などに附いて居る符號を、文章の中に探した。そして眉・口・唇などの言葉を、一つ〳〵覺えて行つた。

が、さうした單語だけは解つても、前後の文句は彼等の乏しい力では一向に解し兼ねた。

一句一章を、春の長き一日、考へあかしても、彷彿として明らめられないことが屢〻あつた。四人が二日の間考へぬいてやつと解いたのは、

彷彿

「眉とは目の上に生じたる毛なり。」

と云ふ一句だつたりした。四人は其のたわいもない文句に哄笑しながらも、銘々嬉し涙が眼の裡に滲んで來るのを感ぜずには居られなかつた。

眉から目と下つて、鼻の處へ來たときに、四人は

「鼻とはフルヘッヘンドせるものなり。」

フルヘッヘンド Verheffend

と云ふ一句に突き當つてしまつた。

無論、完全な辭書は無かつた。たゞ良澤が長崎から持ち歸つた小冊に、フルヘッヘンドの譯註があつた。それは、

「木の枝を斷ちたる跡、その跡フルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土聚りてフルヘッヘンドをなす。」

と云ふ文句だつた。

四人は其の譯註を引き合はせても、容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド！フルヘッヘンド！。」

四人は折々其の言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合はせたまゝ一語も交へずに考へぬ〻

巳の刻　午前十時。
申の刻　午後四時。

堆起

連城の璧

神經 Sinnen

いた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、其の膝頭を叩いた。

「解せ申した。解せ申した。方々かやうで御座る。木の枝を斷ち申したる跡癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、それも堆くなるで御座らう。されば、鼻は面中に在りて堆起するもので御座れば、フルヘッヘンドは、堆しと云ふことで御座らうぞ。」

と言つた。

四人は手を拍つて喜び合つた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の璧を獲たよりも勝つて居た。

が「神經」など言ふ言葉に至つては、一月考へ續けても解らなかつた。彼等は最初難解の言葉に接する毎に、丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んで居た。初め一年の間、どの頁に

蔗を噉ふ

もどの頁にも、轡十文字が無數に散在した。

が、彼等の、先驅者としての勇猛精進は、すべてを征服せずには居なかつた。一箇月六七回の定日を怠りなく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も明かになり、書中の轡十文字は殘り少なくかき消されて居た。

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る欣びで酬いられて居た。語句の末は明かになるに從つて、次第に蔗を噉ふが如く、其の中に含まれた先人未知の眞理の甘味が、彼等の心に浸み込んできた。

彼等は邦人未到の學問の沃土に、彼等のみ足を踏み入れ得る欣びで、會集の期日毎に、兒女子の祭を見に行く心地で、夜の明くるのを待ち兼ねるほどになつて居た。

（菊池　寛―蘭學事始）

上田松井の二君　文學博士、東京帝國大學名譽教授、上田萬年。文學博士、東京文理科大學名譽教授、松井簡治。

心祝　心ばかりの祝。

今や云々　大正四年に當る。

二三　學術の意義

十年一昔といふことを思ふと、上田・松井の二君が國語辭書の編纂に著手せられてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晩餐會に招かれて打興じたのは、ついこの間のやうな氣もするが、その頃始めて小學校に入つた余が娘は、已に人に嫁いで、人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今やその第一卷がいよ〳〵出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに極りがない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日

工程　仕事の道程。

カード　Card こゝにては採集語を誌す用紙。

捗の行かぬ

松井君の邸　東京市小石川區關口駒井町。

本の國勢を一變せしめた。政治や、軍事や、工業や、貿易の進歩發展の跡を見ても、その間の十年は通常の十年では無かつた。二君の編纂事業は、かういふ中に徐々とその工程を進めて行つたのである。

鑛山から掘出されて選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬、幾十萬といふ古語や新語は、幾百部、幾千部の典籍・圖書の中から摘出せられ、拾集せられて、書留められ、整理される。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、秋も暮れ春も逝いて、暦も幾度か改まる。同じ仕事がはてしなくいつまでも續く。傍から見れば捗の行かぬことは齒痒いやうで、いつ方のつくことかと危まれる程であつた。編輯室は松井君の邸内の離家にあつたが、それでも夜半の半鐘に肝を

ぢみ

拮据　忙しく働く形容。

冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾度か分らぬ。二君の筆と頭腦とは間斷なくこの間に活動して、採るものは採り、捨てるものは捨て、その進捗は遲いが、その成果は確實であつた。かくて粒粒積上げた砂子も、遂には山を成す喩のやうに、編纂の稍〻緒に就いた頃までには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻となく進水式に浮び出たのであつた。

學者の仕事はぢみである。目覺しく世人を驚かすやうなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たびその室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人もその難事業たることを承認せずには居られぬ。また編纂者の決心と根氣とを尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業ではなくして、實は國家的大事

緊急　必要に迫ること。

文物　文化の生産物。

業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、隨つて國家教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に依らねばならず、教育の進歩も國語の普及が根本である。狹い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに增加したのを祝賀する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦位で滿足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。また精神界を支

配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民にとりての立派な強みになる。この一大産物が堅忍不拔な二君の手に依つて成就せられたことは、友人たる余の言ひしらぬ喜悅を感ずる所以である。この十年は國語界に於ても、また無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業は、いつも世間と沒交渉のものでは無い。專心な研究は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て居るわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも絕えず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易の業では無い。靜寂な編輯室は、紛糾（まち）した全社會と常に相往來して居るのである。

堅忍不拔（がまんづよく、ぐらつかぬこと。）
沒交渉
紛糾（みだれもつれる。）

幾多の困難にうち克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな國家事業を建設せられた二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。後世の人は、必ずこれを明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の滿足と喜悅とを察知すると同時に、今か〳〵と十餘年を待暮した同友と共に、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮べようと思ふのである。

（芳賀矢一――大日本國語辭典の序）

ある人鴟鴞をかひて、それを囮にして鳥を捕へけるに、同じく殺生する友だちのもとより、みゝづくをかりに越しけるが、其の文に、みゝづくを略してづくと書きて、其の末に「づくとはみゝづくの事にて候。みゝづくと書き候ひては文字かず多く、事長きに成り候故にづくと書き候」と長々とことわりけり。それならば始めよりみゝづくと書けかしと片腹いたし。

（室鳩巣――駿臺雜話）

大白（大いなるさかづき。）

ウェストケンシントン West-kensington ロンドン西區テームス河の南にある地名。
クリサンセマム Chrysan-themum「菊」の義。
洒落者 シヤレモノ。
胎生 タイセイ。

自修文

一　言葉の上の喜劇

ウェストケンシントンをウェストケンシントンと發音しては、英國人には通じない。「上杉謙信殿」といふ方が、よりよく通用するとは、誰が言ひ出したことか知らぬが、今日では、もはや一種の古典的な傳說となつてゐる。クリサンセマムは日本語である。「禁裡さんの紋」であると言ひ出した洒落者もゐる世の中である。これくらゐの傳說の胎生は、決して異とするに當るまい。

たしか今某大學の講師をしてゐられるU氏であつたと記憶するが、倫敦で或るレストランに立寄つて、鮭に胡瓜をあしらつた料

サモン Salmon
キューカンバー Cucumber
傍證

理を他人が食べてゐるのに、食指頓に動き、鮭はサモン、胡瓜はキューカンバーと、型の如く發音したが、一向にそれが給仕に通じない。困り果てたが、氏の食慾は語學の上に超越して、頻りに口のなかに唾液を分泌させる。聞耳を立てゝ、懸命に客人の云ふことに氣をつけてゐると、どうも「サルモーキューカ」と響いて來る。必要は發明の母である。氏は遙々日本を離れて、倫敦の空で、サモンーキューカンバーと辭書の教へてゐるところは、實は「猿も休暇」であらねばならぬことを學び知つた。そこで早速「猿も休暇」とやつてのけると、給仕はすぐ心得顏に、鮭と胡瓜との料理を運んで來たといふ。かうなると「上杉謙信殿」も決して馬鹿にしたものではない。それは單なる傳說以上の或るものであり得るといふ傍證を獲得したわけである。

オックスフォード Oxford

這般

パードン Pardon

オックスフォードに滯在してゐた時のことである。或日友達が、至極眞面目な顏をして、

「こちらの者は、話をしてゐるときに、よくボーン、ボーンと云ふぢやないか。一體あれはどういふ意味だい。」

と云ひ出した。自分はすつかり面喰つてしまつた。自分は英國の土地を踏んで既に半歲になつてゐたが、不幸にして未だ嘗てその「ボーン」を耳にするの光榮を有しなかつたからである。しかし自分と殆ど同じ環境のうちに生活してゐる友達が、麥酒の栓をぬくやうな這般の怪音を屢〻耳にするといふ以上、自分の耳にもこれを受入れつゝあるに違ひないと思つて、いろ〳〵考へた末、やつとそれが他人の言つたことを聽返すときに、英人の口からよく漏れる「パードン」であることに想到して、これある哉と、覺えず手を拍つ

徒然草に云々「栂尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふ男、『あしあし』といひければ、上人立ちどまりて、『あなたふとや、宿執開發の人かな。阿字阿字と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりに尊くおぼゆるは』と、たづね給ひければ、『府生殿の御馬に候ふ』と答へけり。『ことはめでたきことかな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結緣をもしつるかな』とて、感涙をのごはれけるとぞ。」

ジグムンドーフロイド Sigmund Freud 精神分析學者。

たことである。

徒然草に賤しい男が馬の脚を洗つてやるとて「脚、脚」と云つてゐるのを、通りかゝつたお坊さんが、「阿字」と聽違へて、その男の佛心に感涙を催した由が書いてあるのは、誰でも知つてゐるところであらう。自分はこの條を讀むたびに、ジグムンドーフロイド博士などに話して聽かせたら、屹度精神分析學の好個の研究材料だと面を輝やかすだらうと想像するのであるが、パードンをボーンと聽き誤つてゐる友達を、この新鋭な心理學の研究臺に上せたらどんな心的錯綜の結果といふことになるだらう。斷つて置くが、この友達は決して麥酒の栓をぬく音に執著する程の酒呑みではない。

しかしこんなことで、友達の耳を笑ふ權利は、自分には少しもない。嚴密な意味で同一の範疇に入れることの出來る言葉の上の

プログラム
Programme

フリードリッヒ大王
Friedrich der Grosse 普魯西王フリードリッヒ二世。（一七四〇―一八八六）

喜劇を、自分も體驗してゐる。巴里の或小劇場で、座席についてゐると、後の方で頻りに「ポカーン」『ポカーン』と叫ぶ聲がする。貧弱な自分の佛蘭西語の知識を以てしても、「ポカーン」は變である。驚き怪んで聲のする方をよく見ると、雪白の前掛をかけた賣子たちが、芝居の番組（プログラム）を呼び賣りしてゐるのであつた。で、自分も座を起つて、謹んで一枚の「ポカーン」を買ひ込んだことであつた。

聞違へのほかに、意味の取違へがあつて、言葉の上の喜劇が一層多樣になる。誰でも知つてゐる話ではあるが、フリードリッヒ大王は、近衞兵に新顏がはひると、きまつて第一に年齡を尋ね、次に入營してからの日數を問ひ、終りに給金と待遇とに滿足してゐるかと聞くのであつた。或時少しも獨逸語を解せぬ一人の佛蘭西人が、近衞隊に入ることになつた。彼は大王の質問に應ずべく、お定

慣例

まりの順序に應じて返答の出來るだけの言葉を諳誦して置いた。ところがどうしたのか、大王はいつもの慣例を破つて、眞先に、

「入營してから何日になる。」

と尋ねた。新兵はこゝぞとばかり、

「二十一年です。」

としやちこばつて答へる。大王は驚いて、

「なに！そしてお前はいくつだ。」

「一歲です。」

と、新兵は得意でゐる。大王はあきれ顏に、

「何だと？こりや、朕かお前かが氣が違つたらしいぞ。」

と叫ぶと、新兵は澄して、

「どちらも。」

とやつてのけた。

東北出身の某代議士は、桑港に著いて、ホテルから電話をかける時、頻りに「イフ、イフ」と叫んで、對手を面喰はせたさうである。故國で電話をかける時の「もし、もし」の役を、「イフ、イフ」に勤めさせようといふのである。しかしこの無鐵砲な直譯も、決してその仲間を有しないといふ譯ではない。そゝつかしい或男が、西洋人の足に水を注ぎかけて、平あやまりにあやまつたはいゝが、それが却つて對手を一層怒らせてしまつた。仔細はその粗忽者が、「サンキュー」を連發したからである。なるほど水をかけられた上に「有難う」を繰返へされては對手が不興がるのも無理はない。しかし「サンキュー」を「多謝す」と覺え込んだ御當人は、心からおのれの粗忽を陳謝してゐるのであつた。

イフ、イフ if, if

サンキュー Thank you.

血眼になる

ベルリンで古本探しに血眼になつてゐた頃、こんな話を聞かされた。どこかの官省から派遣された一人のお役人が、宿に落ちつくとすぐ散歩に出るとて、同伴の一人に、

「宿の名を忘れると大變だぞ。この旅館は……。」

と、街路に出たところで、振り仰ぐと、「アインガング」とある。

「さうか、ホテル-アインガングか。これで迷子になる心配はないぞ。」

と得意さうな顔をしたと。

自分はこの話を信じなかつた。いづれかうしたことに興味を持つ或茶目の作爲譚に過ぎないだらうと思つてゐた。ところが、幸か不幸か、巴里でこれと全く同じ言葉の上の喜劇が、實際自分の眼の前で、展開したのであつた。餘り親しくはないが、日本人同志

アインガング Eingang 「入口」の義。

といふわけで、たまに市内散策を共にしてゐた某氏、地下鐵道の或停車場から出るなり、

「歸りにも、こゝから乘るから、停車場の名を覺えていかう。」

と後をふり仰いで、

「あゝ、ソルテイといふのか。」

と呟いた。奚ぞ知らん、「ソルテイ」は「出口」に過ぎなかつたのである。

（松村武雄―朗かな斜視）

ソルテイ
Sortie

甕に片口味噌擂るな。　　龜井・片岡・伊勢・駿河。

猫に小判。　　下戸に御飯。

玄關に席を改めて口上を聞く。　　林間に酒を暖めて紅葉を焚く。

二　銀翼を輝かして

名だたる

東海道の空を旅して眼を悅ばすのは、名だたる海と灣と大河と湖水とが錯綜連續して釀し出す風光の變化である。東京灣は數個のお臺場で單純が破られてゐる。駿河灣に於ては、赤人の田子の浦も樗牛の清見寺も廣重の興津川も、二千米以上の上空からは全くわからない。三保の松原に於ても、上から見ては關西人の所謂けつたい極まる形に過ぎない。しかし、駿河灣の中でも、沼津から灣入した七浦や三津のあたり、殊にお椀をふせたやうな淡島あたりの眺は、上から見ても優れた日本畫を見るやうだ。

遠江灘や伊勢灣も海岸傳ひに飛んで行けば、たゞ水の色、波の形の美しさに心を奪はれるだけである。これは、太平洋沿岸に限ら

田子の浦　靜岡縣富士郡にあり。

樗牛　高山林次郎の號。文學博士。明治三十五年歿。年三十二。

廣重　歌川廣重。本姓安藤氏。德川末期に於ける浮世繪風景の版畫家

興津川　靜岡縣德間山に發し駿河灣に注ぐ。

ず、荒波で有名な日本海でもさうであるが、機が難航でない限り、日本の本土の海岸の上を飛ぶほど安易な氣持を與へられることは、恐らく他にあるまい。潮流の工合により、海の水が岸近くと沖とで青と碧とに變り、風が吹けば、薄の穂のやうに青海原に波頭が白く出揃ふ。

越後の親不知の斷崖から直江津にかけての海岸の俯瞰も亦忘れ難いものゝ一つである。冬の日は知らず、このあたりの夏の海は春の海といひたい程の穩やかさで、海岸の屈折と斷崖との趣は、どの一片を切りとつても立派な風景畫だ。セザンヌなどが好んで描きさうな明るい黄綠と青との油繪だ。僕がこの邊を飛んだ日は、殊に靜かな朝であつた。油の如く平滑な海面には機影が水鳥の如く寫つた。佐渡が島は水煙の中にぼんやりと浮んでゐた。

セザンヌ　Paul Cezanne　フランスの畫家。

河床

水瀨

飛行機から僕の觀た河の中で、東海道では木曾川・天龍川其の他二三の小河を除けば、富士・大井その他の大河は、海近くなると實に美しい形相を示してゐる。河床は何尾かの鮫か鮃（ひらめ）かが腹を見せてゐるとでもいはうか、或はハムの切れを皿に盛つて出したやうだといはうか。かうした形容は、何れにしても綺麗ではないが、實際は飛行機から觀た地上の景色の中では最も美しいもの〻一つである。殊に、海岸近い川の淺瀨には、綠の藻が幾かたまりにもなつて、水瀨のせゝらぎにゆら〳〵と搖れて、風に搖られる蓮の花の

やうな美觀を呈してゐる。

湖では琵琶湖の優婉、濱名湖の明快、野尻湖の凄寥がある。二千米位の高度では琵琶湖は二分の一も全觀出來なかつた。この大湖を取り卷く諸山は、女人群像とでもいひたいほどもの優しい。僕はこの湖では大津の街が湖岸へこぼれ落ちるやうに擴がつてゐる景氣のよさが好きだ。いかにも、大湖が生んだ市といふ姿である。

濱名湖は端から端までその上を飛んで、小半島、小灣、小入江が多くて、まるでバルカンの縮圖でも見るやうな興味が湧く。海に接してどこまでも明るく陽氣である。野尻湖は、芙蓉湖といふ別名もあるといふが、空から見るとなるほどとうなづかれる。この湖の日本海寄りに黒姫、飯繩、妙高など一癖ありげな山が聳立してゐ

一癖ありげな山

るのが、自然凄味を與へてゐるのだらうが、一つはその三十數米もあるといふ水深のせゐもあるに違ひない。湖底にはこの湖水發生前の大森林が、その儘白骨の林となつて、今でも天氣清澄の日は、水面から覗かれるといはれてゐるが、僕の飛行した時は、生憎附近は薄曇りでそれを見ることが出來なかつた。僕はそれを見る爲に、まう一度あの附近を飛びたいと思つてゐる。

（鈴木文史朗―空の旅地の旅）

君が代は、天の羽衣稀に來て、撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なりあづま歌、聲添へて數々の笙・笛・琴・箜篌、孤雲の外に滿ち〳〵て、落日の紅は、蘇迷路の山をうつして、綠は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりてげに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。　さるほどに時移つて、天の羽衣浦風にたなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、足高山や富士の高嶺、かすかになりて天つみ空の霞にまぎれて失せにけり。

（謠曲「羽衣」）

三　夜叉王

人物　面作師　夜叉王　源左金吾頼家
　　夜叉王の娘　桂　下田五郎景安
　　同　楓　修禪寺の僧

時　元久元年七月十八日

所　伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王の住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて素燒の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其のうしろは畑を隔てゝ塔の峰つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲けり。

夜叉王は屋内にて、楓は門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧

頼家　源頼朝の子。元久元年歿。年二十三。（一八四二―一八六四）

修禪寺　一名桂谷山寺、眞言宗。靜岡縣田方郡にあり。

一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿（二十三歳）、後より下田五郎景安（十七八歳）頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりませぬぞ。

楓　はつと平伏す。頼家主從進み入れば、夜叉王も出で迎へる。

夜叉　思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませぬが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は縁に腰を掛ける。

夜叉　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと、曩に其の方を召し出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣しておいたるに、日を經れども出來せず、幾度か延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

疎相　ソサウ。そこつ。

丹精を凝す

懈怠
ケタイ。

棟梁
トウリヤウ。一家又は一國の重鎮。

等閑
なほざり。

五郎　多寡が面一つの細工、如何に丹精を凝すとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初め、其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ獻上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌散々ぢやぞ。

賴家　予は生れ付いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣すこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ。仔細を申せ。

夜叉　御立腹恐れ入りましてござります。勿體なくも、征夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一つも無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

夜叉
梵語 Yaksa のあて字。人を害する惡鬼をいふ。

羅刹
ラセチ。梵語 Raksasa のあて字。人を食ふといふ黑身・綠眼・赤髮の惡鬼の名。

五體
全身。

賴家　えゝ、催促の都度に同じ事を……。其の申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫びを申せ。

夜叉　其の期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事かはりて、これは、生無き粗木を削り、男女・天人・夜叉・羅刹、ありとあらゆる善惡・邪正のたましひを打込む面作師。五體にみなぎる精力が兩の腕に自ら湊る時、我がたましひは流るゝごとく彼に通ひて、始めて面も作れまする。たゞし、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年・二年の後か、われながら確とは

三島神社の放し鰻

癇癖　カンペキ。かんしやく。

冥利　ミヤウリ。神佛の加護。

わかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿。上樣御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはします。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取り止の無い事ばかり申上げてゐたら、御癇癖が愈〻募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜叉　ぢやというて、出來ぬものはなう。

僧　何の、こなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京・鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは如何にも無念ぢや。

頼家　何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも早急には出來ぬといふのか。

夜叉　恐れながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

癇癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀引取つて、あはや拔かんとす。

奥より桂走り出づ。

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

頼家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう父樣。

夜叉王は默して答へず。

五郎　何、面は既に出來して居るか。

凡夫

頼家　えゝ、おのれ前後不揃のことを申立てゝ、予をあざむかうでな。

桂　いえ〳〵嘘僞（うそいつはり）ではござりませぬ。面は確に出來して居りまする。これ父様、まう此の上は是非がござんすまい。

楓　ほんに然うぢや。ゆふべ漸く出來したといふあの面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上様に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて

來て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う〳〵。

楓　あい〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂は受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家は無言にて少しく心解けたる體なり。

桂　僞ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家は假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあぐ。

頼家　おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上様御顏に生寫しぢや。

頼家　むゝ。

飽かず打まもる。

僧　さればこそいはぬ事か。それ程の物が出來してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝ。

めがね　物の善惡・可否を見定むること。

夜叉王、容を改めて、

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致し方もござりませぬ。方々には其の面を何と御覽なされまする。

頼家　さすがは夜叉王、天晴のものぢや。頼家も滿足したぞ。

夜叉　天晴との御賞美は、憚りながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んで居るとは……。

夜叉　年來、數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打ち直しても生きたる色なく、たましひも無き死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

怨靈　うらみて死せしものゝたましひ。

怪異　妖怪。

重疊　チョウデフ。

五郎　そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉　いや〳〵、どう見直しても生ある人ではありませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈怪異なんどのたぐひ……。

僧　あ、これ〳〵、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊。有難く御禮を申されい。

頼家　む、、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。

夜叉　たつて御所望とござりますれば……。

頼家　お、所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め、頼家にさゝぐ。頼家立つ。

五郎も立つ。桂共に庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安心いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。

賴家行きかゝりて物につまづく。

賴家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜叉王はぢつと思案の體なり。

楓　父様、お見送りを……。

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

賴家等相前後して出て行く。夜叉王は起ち上りてしばし默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と緣に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓は驚きて取

縋る。

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉　切羽詰りて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは、悔んでもかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑をのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣でござりませう。如何なる名人上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が出來ようならば、それが卽ち名人ではござりませぬか。

夜叉　むゝ。

楓　拙い細工を世に出したを、さ程無念と思し召さば、これから愈〻

切羽詰る

精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

楓は絶りて泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を瞑づ。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。

（岡本綺堂―夜叉王）

岡本綺堂　名は敬二。劇作家。東京の人。明治五年生。

元久元年七月十八日、實朝、時政、計らひ申して修善寺に人を遣し、賴家卿を浴室の内にしてひそかに刺殺し奉る。御年未だ二十三歳、一朝の露と消えてあへなく名のみを殘し給ひ、永く白日のもとを辭して一堆の塚の主となり給ひけり。哀れなりける御事なり。

（北條九代記）

主要宛字表

おぼつかなし	覺束なし
かひ	甲斐
きつと	屹度
さすが	流石。遉
しまふ	仕舞ふ
せつかく	折角
だめ	駄目
ちやうど	丁度
ちよつと	一寸。鳥度
でたらめ	出鱈目
とく	兎角。左右
とにかく	兎に角
なか〳〵	却々
ふるまひ	振舞
はかなし	果敢なし
むだ	無駄
むづかし	六ケし
やたら	矢鱈
やはり	矢張

通用字表

亘（クワン）　亙（コウ）	わたる。桓に通ず。
体（ホン）　體（タイ）	からだ。笨に同じ。あらし。
但（シヨ）　但（タン）	たゞ。「但馬」つたなし。拙劣。
僭（カツ）　僭（セン）	身分を越えておごる。僭越。みだりがはし。わるがしこし。

冑（チウ）	かぶと。	壺（コ）	つぼ。
冑（チウ）	よつぎ。嫡子。	壺（コン）	宮中のみち。
協（ケフ）	かなふ。叶。	托（タク）	拓に同じ。ひらく。
恊（ケフ）	おびやかす。脅。	託（タク）	よる、たのむ、ゆだぬ。
刺（シ・セキ）	さす。「名刺」	擔（タン）	になふ。かつぐ。
刺（ラツ）	もとる。そむく。	担（タン・ケツ）	はらふ。あぐ。
臺（タイ・ダイ）	うてな。だい。	槍（サウ）	やり。
台（タイ）	星の名。	鎗（サウ）	鐘の音。
後（コウ・ゴ）	のち。あと。	缺（ケツ）	かく。「缺席」
后（コウ・ゴ）	きみ。「皇后」	欠（ケン）	あくび。「欠伸」
商（シヤウ）	あきなひ。	絲（シ）	いと。
商（アキ）	もと、本。	糸（ベキ）	ほそいと、細絲。
羨（セン）	うらやむ。	郤（ケキ）	ひま、隙。
美（イ）	支那の地名。	郤（キヤク）	しりぞく。「退郤」
鍛（タン）	きたふ。「鍛錬」	蟲（チユウ）	むし。
鍜（カ）	しころ。鍛。	虫（キ）	魚介類の總稱。まむし。
詫（タ）	わび。「詫狀」	詑（タン）	詑に同じ。あざむく。
詔（タウ）	うたがふ、疑。	諂（テン）	へつらふ。
證（ショウ）	あかし。しるし。	豐（ホウ）	ゆたか。
証（セイ）	いさむ、諫。	豊（レイ）	禮の古字。
迄（キツ）	まで。	選（セン）	えらぶ。
迠（セフ）	ゆく、行。	撰（セン）	つくる。

類字表

溢	イツ。あふる。	縊	エイ。くびる。
辯	ベン。—舌。—護。	辨	ベン。—當。—天。
贏	エイ。かつ。	贏	ルヰ。よわし。
臆	オク。—病。	憶	オク。記—。
己	キ。コ。おのれ。	已	イ。すでに。
檢	ケン。—査。	險	ケン。—阻。
肅	シユク。つゝしむ。	蕭	セウ。さびし。
戌	ジユツ。いぬ。	戍	ジユ。まもる。
衰	スヰ。よわる。	哀	アイ。あはれ。
拆	セキ。わかつ。	柝	タク。ひやうしぎ。
徵	チョウ。めす。	徽	キ。はた。のぼり。
釣	テウ。つる。	釣	キン。ひとし。
博	ハク。ひろし。	搏	ハク。うつ。
偏	ヘン。ひとへに。かたよる。	徧	ヘン。あまねし。
喻	ユ。さとす。	愉	ユ。たのしむ。
綠	リョク。みどり。	緣	エン。ゆかり。
祿	ロク。官—。	錄	ロク。記—。
毆	オウ。—打。	歐	オウ。—洲。
隘	アイ。せまし。	瓣	ベン。—髮。
贏	エイ。地名。	億	オク。—兆。
巳	シ。	已	み。
撿	ケン。	檢	—校。
簫	セウ。(樂器の名)	肅	つちのえ。
戊	ボ。	戌	まごころ。
衷	チウ。	哀	をる。
折	セツ。	拆	こらす。
懲	チョウ。	徵	かぎ。つりばり。
鈎	コウ。	釣	にぎる。
搏	タン。セン。	博	あまねし。
遍	ヘン。	偏	たのしむ。
偸	トウ。	愉	ぬすむ。
椽	テン。	緣	たるき。
碌	ロク。—青。	祿	
謚	エキ。笑ふさま。		
瓣	ベン。花—。		

緘　カン。封―。
筋　キン。すぢ。―旅。
羈　キ。
祇　ギ。キ。神―。
款　クワン。まこと。
遣　ケン。やる。
卿　ケイ。キヤウ。―相。公―。
堅　ケン。かたし。
裁　サイ。―縫。
灸　シヤ。セキ。あぶる。したしむ。
鍾　ショウ。―馗。
萩　シウ。はぎ。
飾　ショク。裝―。
戎　ジウ。―衣。
籍　セキ。書―。戸―。
選　セン。サン。―擧。
戴　タイ。いただく。

鍼　シン。指―。
筋　ジョ。箸に同じ。
羈　キ。―絆。
祇　シ。―候。
欸　アイ。あゝ。歎聲のさま。
遣　キ。のこす。
鄉　ガウ。キヤウ。―社。―土。
竪　ジュ。童子。
栽　サイ。―培。
灸　キウ。やいと。
鐘　ショウ。―銘。
萩　テキ。をぎ。
飭　チョク。戒―。
戒　カイ。―具。
藉　シヤ。セキ。慰―。狼―。
撰　セン。サン。―著。
載　サイ。のす。

陶　タウ。―器。
段　ダン。―落。
低　テイ。ひくし。
謄　トウ。―寫。
杯　ハイ。さかづき。
廢　ヒン。―止。
貧　ヘイ。まづし。やぶる。
敝　ホウ。とま。
篷　マン。―性。
慢　ミツ。―接。
密　ラン。おこたる。
懶　ラツ。潑―。
刺　リ。うら。
裏　リツ。ソツ。利―。―先。
率　レン。をさむ。
斂　ヲ。あゝ。―咽。
嗚

淘　タウ。―汰。
叚　カ。かる。
抵　テイ。あたる。さはる。
騰　トウ。沸―。
抔　ホウ。すくふ。
癈　ハイ。―兵。
貪　ドン。むさぼる。
敝　シャウ。あきらか。
蓬　ホウ。よもぎ。
漫　マン。―言。
蜜　ミツ。―柑。
懶　ライ。きらふ。
刺　シヤ。セキ。名―。
裏　クワ。つゝむ。
卒　ソツ。―倒。
斂　カン。あたふ。
嗚　メイ。なく。

文部省檢定濟

昭和八年十二月二十七日　中學校國語漢文科用
昭和九年一月二十九日　實業學校國語科用

昭和八年八月一日印刷
昭和八年八月五日發行
昭和八年十二月十八日訂正再版印刷
昭和八年十二月廿一日訂正再版發行

最新國文讀本（全十冊）
定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱
編者　武田祐吉
發行者　東京市神田區錦町二丁目七番地　湯川松次郎
印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下精一郎

發行所　東京市神田區錦町二丁目七番地
大阪市南區順慶町一丁目五十三番地
湯川弘文社

[redacted]

[redacted]

[redacted]